明治三十年六月十日

女學雜誌

第四百四十三號

第四百四十三號目次

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や簡易實際を專らにし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學教界に對する吾黨多年の主義を發表するもの。

◎單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるゝものあらは其望に應ずべし

女學雜誌定價表

前金	壹冊　價金拾錢　(無郵稅) 一年前金　金貳圓	
廣告料	一行　一回(廿七字詰)前金十錢 同　三回以上　一割引 同　六回以上　二割引 但し不道德なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く	
送金	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし	
注文	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし	

第四百四十二號目次



第百四十三號目次

[illegible]（[illegible]ルスト氏論「[illegible]りの天使」）

[illegible]しべからず

[illegible]

部北耕夫

◎雜錄

[illegible]りの天使　紡績女の歎◎すみれ（花影子）◎[illegible]の安[illegible]つ子（通信）

◎問答

[illegible]入さの問答

◎時文

[illegible]小說史◎先秦文學◎松虫鈴虫◎牧の方

◎片々◎時報

社告

◎本誌は[illegible]の兩日[illegible]

◎[illegible]を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、十五日發行の分は、女學教界に對する[illegible]多年の[illegible]を發表するもの。

◎單に十日[illegible]のみを購求せんと[illegible]らば其[illegible]に應ずべし

女學雜誌定價[illegible]

前金	一冊[illegible]　一年前金[illegible]（[illegible]無郵稅）
廣告料	一行[illegible]　同三回以上[illegible]一割引　同六回以上二割引　但し不道德なる廣告は謝絕す。總て[illegible]の廣告は社誌の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麹町郵便局に宛て小爲替にすべし◎郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割を添ゆべし
注文	注文は東京麹町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

第百四十二號目次

[illegible]

教育

甚十巨惡(?)の責任

教育界時評（教育上の亂[illegible]）◎万國學生大會◎日本主義◎教育界の[illegible]◎教育界の紛亂事件◎教員の反抗◎野心家◎諸學校教員の狀態）

[illegible]生

雜錄

寫眞（花影子）◎こがれの指輪（咆鳴子）◎話の種十數件（長汀子）

時文

◎社會百方面◎藤田東湖◎馬場辰猪◎新著月刊第二◎新小說第二年第七卷◎日の出島◎女界文壇雜俎

片々◎時報



女學雜誌

第四百四拾參號

明治三十年六月十日發兌

社説

特り女を責むべからず

何人にかゝはらず、責を己以外に歸して、他を罵らんとするは、殊勝なる事にあらず。如何に省りみても我が一心をすら吾が自由にすることの出來ざるとき、聖賢の道をもつて他を遇し、彼等が理想の如く處置せずとて太たく詰責せんとするは寧ろ我儘なる心掛とこそ言ふべけれ。責められしとて憤ふるは、憤ふりてのみ人を責むると同様の過まちならん、吾人之を諒すれば同もに遺憾なきを得ず。

近來、女子敎育論の再興するにつれて、復た亦た慷慨論を聞くこと度々なり。其の所論を聞けば、從來の女子敎育法は皆な誤まりたり、將來は其の根本より改めざる可らずと言ふ、盛んなる議論もある如し。而して、斯る議論を唱ふる人の大抵男子なることは如何にも恥ぢ入りたることなり。翻つて男子社會の敎育法を見れば、必らずしも成効とは言ひがたし。若し其論者の慷慨する如き事件を標準として論ぜんには、從來の男子敎育法は皆な失敗せりと言はざる可らず。然るに、身現在男子にてあり乍ら、男書生の爲めに憂ひ若くは恥ること未だ切ならず、反つてわざ〳〵女子の爲めにのみ高言して憚からざるに至りては、丈夫の面目としても快き事にあらず、心あるものは寧ろ慚愧すべし。

有ふれたる不平の第一は、女學校にて學びたるその實用に効なきことを言ふにあり。然し乍ら、男書生が其の學校にて學びたることを實地の用に施こしつゝある者は幾人あるべき乎。政治學、經濟學、哲學、倫理學など、八釜しき學名もあり、其の學位も受けたる族も多きが、實地の奏効如何んと見よ。あまり女をのみ責めがたき所以を覺るべし。女學校の卒業生が家計向に上手ならぬことを惡口する人々は、同時に、學者先生等の經濟に愚なることを慷慨せられたき者也。只だ金を溜める斗りの事には、未だ曾て學校の門をも跨がざりし人々に上手

の人はあるものなり。

第二には、不品行、もしくは醜聞など云ふとなるが、之は實際無きと迄を、新聞紙のヒマなる爲めに記載したるに由るとも多くあれど、いよ〳〵實際にありし丈の事實に付ても、責を女にのみ歸せんとするは、何等の理由によるものにや。不品行は女一人にて犯すものにもあるまじく、又、女が他を誘ふと云ふともあるまじき也。

第三は、西洋の眞似をすると云ふとを不平とするとなるが、西洋の眞似をせしは、今に初まりたるとにもあらず、又、女子教育の事のみにもあらず、申さば、大勢の運びにして、何ものか能く其の流行以外に卓出したるともある。女子教育は男子教育とのつり合ひを保もち、世間の風習の移り變りに參考せざる可らざるものゆゑ、世を擧つて西洋の眞似をする時世に於て、女子の教育方が此の大勢に伴隨せしを咎めんとするは、寧ろ愚にあらずや。

第四は、女學生の女らしくなき由を不平にするとなるが、男子、男らしくなきものも隨分多きを如何んせん。又、是迄の風習と違ひたる新らしき境界に入りたる最初は、從來のつゝしみを幾分か減失して、見かけに優美ならぬ不調子の形姿を見めすけ免かれがたきとなれば、但だ此の一事をもて、大躰の取捨を決す可きにもあらず。況んや、女の性、從順を好み服從を欲するものゆゑ、男子にして男らしくあらば、女は自然と女らしくなるもの也。牝鷄の晨たするは、牡鷄の無き時か、又は牡鷄の馬鹿となる時也。牝鷄は、自から好んで時を叫ぶものにはあらざるなり。左れば、女の女らしきを要するに當りては、男子の大丈夫らしくあるべきを望むとも亦切ならざる可らず。

二

吾人多くの男子に就て經驗するに、家の内にて小言の六かしく、女をのみ叱るものは、大抵男子としては、意氣地のなきもの也。眞の丈夫は、自から責を引きて、女性を非るとなぞはせざるもの也。左れば、特り女をのみ責めんとするの議論をせらるゝ人々の素性も大抵は分明なり。

但し此の一論文を楯にして、以て女性自から防ぐの辯とせらるゝ婦人あらば、それは此上なき卑怯の振舞なり。惟ふに、優美なる女性の人や、斷じて此の如きとはある可らず。

家庭

貯産家の維持

赤手を揮つて一代身上を造りあげる程の人は尋常のものにあらず。大膽極まるうちに綿密の用心もありて、自から世道人情の粋に通ずるものゆゑ、人、大方は恐服せざることなし。然るに、其の二代目となりて、握り一方となり、附合もせざれば、慈悲もかけず、此丈けの身上を大事にさへすれば、外に人と關係する用はないと思ふ行状の吝嗇もの多くあり。世人之を許するの風聞に云く、あれでは身代を守ることは出來やうが、迚も大きくすることは出來まじ、先代に較べては餘程の相違なりと。

此の評大いに誤まれり。先代と較べて餘程の相違ある程のものが、たとひ之を大きくすることは出來ずとも、守ることは出來ると思ふこそ淺墓なる見識にてあるなれ。人の評判さへ既に斯く誤まり居る故。本人が誤まるも無理にはあらず。本人の面目は、親の身代を維持するにあり、之を守ることすら出來まじと言はれんには、ちと掛念反省する所もあらんかなれど、大きくすることは出來まじ、維持することは出來るならんと言はるゝが即ち思ふ坪にて、内心の得意一と方ならず、見よ見よ、世上の素寒貧や馬鹿物は何を爲しつゝありや、國家の爲とか、公の爲とか言ひて無益の奔走を爲し、親ゆづりの身上に疵をつけて先代よりも減るやうな事を爲て、何の功ありや。己は、顏出しもせず、走り廻りもせず、人に善く言はれやうとも思はぬ代りには、身上は伸して見せる、たとひ人に賞められても、身代が減つては遂に人から輕蔑せらるべし、今の壯士風の奴等は、所詮は己に平服するの外なかるべしと信じて、吾が身代を維持することの出來るやうに思ふより斯る大言をも吐くに至るなり。而して、何故左樣の信仰を懷くかと云へば、過半は世上の評判を楯にす。あれでは「守ること丈けは出來やうが」と言はれる、その「出來やうが」を得意とし「丈」の一字を反つて己の面目とする也。吾人思ふに、之は氣の毒なる事なり。斯る思慮にては迚も維持することも出來まじ。多分は三代目に至りて沒落することならんと思はるゝに付ては、先以て世

上の評判を變へ、迚もあのやうにては先代の折角仕上た身代を維持するとは出來まじと言はせて、幾分なりとも二代目なる人の心に反省せしめたきものと思ふ也。

凡そ、財産家の身上は容易に亡ぶものにあらずと思ふが人の癖なれども、大家ほど没落の早きものはなく、成り上り者の身上ほど消え易きものはなし。但だ舊家名家と云ひて、代々の隠徳人知れぬ所に流れ、古川の水絶ずして存外の所に人心を潤ほしたる結果は、倒れんとして亦倒れず、消えんとして尙消えず、俄然中興者の善き仕方によつて忽ち再興することもあるべし。之は、陰徳のおかげ也。一代身上の家には斯る潜勢力のあることなし。一朝、倒れかゝらんとすれば、何かの怨み不平一時に起り來つて、其の倒るゝを速くするものはあるべけれど、微妙隠默の際に之が後楯となりて之を維持するの力となるものはあらず。且つ、財産が多ければ、亡ぶるとは遲きものゝ樣に思ふは大相の誤まりなり。一旦、方針を取違へて、進路、二の足となれば、實は身上の大きいものほど倒るゝとの早きもの也。人や、此の處の理合の妙なるに一考せずんばある可らず。

四

本來、富は天下の寶にして、金は万人の皆な好むものなれば、たとひ一朝吾有に歸したればとて開闢以來の持物の如く考へ、法律上の權利あればとて、泥棒にも取られず、人の爲に失ふこともなきものゝ如く考ふるは、不用心の甚しきもの也。總て大いに益せんとするものは、吾一人にて益せんとするとなし。一人にて益すれば、關係のものよりは怨まれ、吾益を分ちて遣るものも多くなる理合ひゆゑ、可成く衆と同もに益するの雅量は、大度の胸中に自から勘定せらるゝ所なり。家庫は土藏ゆゑ、火事の憂ひなしと思ふとも、怨を受れば、土藏の中より燃え上ることもあるべし。田舍なりとて、火災保險の心得にて、幾分づゝの喜捨金はかねてより近傍にふりまかざる可らず。慈善寄附の入用を、義理づくの損失と思はゞ、其金は死金となりて最早や用は爲さず。名聞の爲に法外の寄附を爲すは、ひとしく亦た賞めた事にあらねど、あの人は公事に薄情なりと言はるゝ其評判は、百圓千圓の金に換へられぬ損の基となるべし。金を造るも金を守るも同樣の入費のかかるものと勘辨して、利益の何程は兼てより其入用として散らさゝる可らず。此の入用は損にあらずして、資本なり、即

ち第二の資本として他日子を產むものゆゑ、決して損失とはならざるものなれど、遠大の思慮と、人情の微妙とを思はぬときは、一寸損の樣に感ぜらるゝもの也。只だ金さへ溜めれば身上大丈夫と思ふ二代目の子には、大抵は道樂者か、なまけもの歟、山師かの出づるもの也。之は當然の譯合なれど、家鷄が家鴨の卵を孵へせし如く喫驚するもの丶多きこそ笑止なれ。かの七面倒なる小理窟のみ言ひて、器械的の道德ばかり主張する親の子に放蕩家あるが如く、吝嗇にして美味ものも食はず、遊びもせず、只だ黃金の數を算へて活潑々の青年に敎訓せんとする家の子に、道樂者や山師の出るは當然の事にて、是れ天理なり、又敎育上の元則なり、何も驚ろくべきことにあらず。斯して折角に溜たる二代目の金は大抵三代目に至つて消失することなるが、其時に至つて初代目は無理をして金を造りしもの、二代目はケチをして金を溜めたるものと紀念せらるゝ計りにて、何人も其の陰德に感ずるものもなく、三代目が早く身代を潰すを善い心地に思ひ、拍手喝采して面白がることなるべし。

左れば、一代身上などの金を守ることは非常に難きものにて、深く人情を辨まへ、世態波瀾を心得たるものならでは出來まじきこと也。金を溜めて置くが守ることと思へば、金箱の代となる迄にて、守るとは言ひがたし。盜賊が錠を明けて中より盜み出すときには、金箱は何の防禦も出來ぬことなるが、分らずやの二代目が人事世態の當然なる結果の爲めに奪ひ去らるゝとも知らで、只暫らく其金を預かり居る爲躰を目して、能く身上を守ると云ふは誤まりならずや。必竟は此の評判によつて誤まらるゝことも多きものゆゑ、先以て公平なる世人は篤と此邊の情理を辨へ、身代を維持することは中々の大困難なる所以を承知して、かの吝嗇に、無慈悲に、公義も知らで暮らす金の番人を目すると、遠からず其身代を亡ぼすものと言はんこそ善けれ。これ即ち彼等番人に對するの慈悲なり、敎育なり。

◎蛇の毒氣を受け、飲食物咽喉を通らずして、涎又は痰を出すものには、蓬の葉(よもぎのは)菖蒲の二味を煎じて與ふれば、立どころに平癒すとぞ。

◎又婦人の月經不順、赤白帶下などにて苦しむものに、白木槿花(しろむくげのはな)の陰干にしたるを煎じて服さすれば、即坐に効驗ありといふ。

徳川家康の育兒

す、か、生

織田、豐臣の迅速なる衰落にも似ず、家康の子孫が長年の相續を爲せしは、一つには、徳川氏の家庭教育法の凡ならざりしに由るとならん。家康が兒孫の躾けに注意せし心切は、遠く今の世の教訓となる節の多くある也。

家康の三人の子は世に謂ふ御三家の祖先となれり。即ち、義直は尾張に、賴宣は紀伊に、賴房は水戶に定められたり。家康既に駿府に隱退してより、尾張、紀伊の兩殿に家老職一人づゝを附けて護役となさん爲め、先づ松平周防守、永井右近太夫の兩人へ内意ありしに、たとひ御草履を取り候とも此儘此旗本に御奉公申したしと願ひしかば事止み、家康も憚ばざりしが、安藤帶刀、成瀨隼人兩人打より密かに相談いたせし樣、大御所樣には、御兩殿への御附人の義を殊の外、御苦勞に思召すとの御事に候、何を仕るも御奉公の事に候へば、兩人申合せ御願申上ぐべしとの事にて、私共の樣なる不調法ものにても苦しからず思し召し候はゞ、御意次第に御兩殿へ御奉公申上ぐべくと申上げたれば、家康は殊の外の機嫌にて、尾張殿義直には成瀨隼人正を、紀伊殿賴宣には安藤帶刀を附し、其後、水戶殿賴房の傅には、中山備前守を任じたり。

慧眼達識、よく人を見るの明ある家康が、公には天下の三鎭たり、私には己が三愛子たる御三家の阿衡として任命したる彼三人の武人は、抑も如何なる人物にして、如何によく其任に奉ぜしか、家康また如何かして、彼等をして能く其職を盡くさしめしか、今逸事の傳へらるゝものを見て、之を知らんとす。

◎成瀨隼人正の事

大阪落城の日、城方の者と見えたる兵士四五百人計、一所にかたまり居るを、家康、茶臼山の陣中より見渡して、是れ幸の事なれば、紀伊殿、尾張殿にも之に取掛れとの命を與へて、早々罷越すべき旨を傳へたるに、出仕少しく延引したれば、御使番衆を召し、隼人の腰ぬけ奴に右兵衛(義直)を早う連れてうせおれと申せとありければ、其者は口上のまゝを、尾張の家從等列をなして並み居る處にて、大聲に申し渡したり。

隼人正は聞きも敢へず、此隼人はつひに腰をぬかしたる覺えは無之候、左樣に仰せられ候御方(家康を指す)こそ武田信玄と御出合あらせられ候節、腰をお拔かしありたれと諸人の聞取るやうの大音にて惡口したり。

さて陣の後、或時隼人正名護屋より駿府に來りて、家康に面謁していひけるやう、先頃大坂落城の日、義直卿茶臼山の陣へ出仕の事遲刻せしが爲め、御使番を以て、隼人の腰ぬけ奴に早く御供仕る樣の仰せ有之候處、私義はしらくも頭の幼年より、御心易く御召仕ひなされ候もの故、如何樣の惡口を仰せられ候とも、苦しからず候。されど御前樣の口上を其儘にて、人聞きも用捨なく申すやうなる者に、御使番抔といふ大切なる役義を仰せ付けられ候事、甚た以て然る可らず候。我君今はなほ御年若にも御坐候へば、尾張一家中の者共は、私義を杖柱のやうに存じ居り候處に、隼人の腰ぬけ奴抔と仰せひられ候ては、諸人の思わくも違ひ、私義の信用にも關し候に付、其節は心ならず甚以て恐れがましき御返答を申上候といひたれば、家康之を聞いて尤至極の事なりといひしとかや。

◎安藤帶刀の事

家康死後に尾張殿紀伊殿共に江府に在りしとき、或日義直、賴宣を見舞ひたるに、其節賴宣には髮を結びかゝりてありければ、出會遲延したるによりて、義直は、紀伊家老安藤帶刀に告げて、別に用事もなく、たゞ此邊を通り掛りの序に立寄りしとなれば、其方に逢ひて御無事のよしを承はりたる上は、最早面會にも及ばずとありたれば、帶力は暫時御待被下度しと申して、賴宣の側に來りて、尾張樣には御待兼被成候にや、御歸成さるべくと仰せありしを、今少しと申上候に付御待ちなされ候。只今君の御親方とては、尾張樣計に御坐候處、御待たせ申され候とが御坐候ものかと、苦々しく述べたれば、賴宣急ぎ髮を整へて、尾張殿に對面したり。義直の歸後、賴宣は、最前髮を理めたる人を呼び出し、先刻帶刀のとの外叱りたる時、我等落涙せし躰、定て鏡に映りたるにて有之べし、其方は認め候やと尋ねたれば、其者さればにて候、御落涙の御顏色、御鏡に映り候を見上申候。尤も尾張樣とは申しながら、餘りなる帶刀が申樣かなと存じ候と答へたれば、

其方などの心に左樣に推量致すとならんと思ひし故、尋ねたるなり。帶刀なればこそ、先程のやうのことをもいひ聞かしたるなれ、外に誰ありて申さんや。あの樣なることをも言ひ兼ねまじき者と、思し召したるがゆゑに、父の我等につけおかれたるなりとて、父家康在世の昔をおもひ出で、落涙ありしとぞ。

◎中山備前守の事

水戸賴房、若年の砌、侈肆放逸度なく、カイラキ鮫の長刀に金鍔を着け、紅裏の附きたる衣服を纏ひて、寬濶伊達の風を好み、人の聞えも惡しきより、家老中山備前守、屢々諫言を進むれども、嘗て之を用ゐざりき。然るに或時將軍秀忠老中をして備前守を呼ばしむ。備前守即ち登城せしに、老中等、今日其方召出され候御用の義は、我等も存ぜぬ次第、定めて後刻御前に於て、直々の御用これ有るべしといひければ、備前守は老中方にも御存じなき御用の義にて私義を召出されたるは、主君御行跡の義御尋ねにきはまれり、其義ならば、有體に申上ては、主人の惡事を訴ふるにあたり、又何事をも知らざるが如くし、或は其罪を蔽ふことをせんには、即ち上を欺くに當れり。よりて一旦の登城は仕りたれ共、御前を憚りて、今より退出致さん、御機嫌相損じ、御仕置等仰せ付けられ候とも、そは覺悟の上なりといひて、老中等の百方止むるをも聽かず、退出なしたり。歸途水戸の上屋敷に到りしに、賴房も、今日家老備前一人召出されし理由、懸念の折柄にて、其由を尋ねたるに、備前は、城中にての次第を述べて、私義は公方樣より何樣の御咎めを受けんやも計り難く、先々切腹と覺悟相極め居り候へ共、此上ながら殘念なるは、第一私義才智無之故、君の御行跡等御悔改めなされ候丈の御意見仕り得ざる事、第二御若年なる君に此備前守を附けおき候へば安心なりと思召有之り候權現樣の御目鏡に違ひ、今更申譯も無き事、第三疾より心付かざるにてはなけれども、彼是と見合せ候て、御不行跡の御相談相手を致し候不屆の奴原を成敗仕らずして、其儘私相果て候はゞ、彌御行跡の障とならんと必定と存じ候事にて候。假令今私切腹身命を終り候はんとも、魂魄は此御殿の內を離れず、永く君を守護なし奉り、御行跡御改め、御上の思召に叶ひ玉ふやう祈り可申候。さらば今世の御暇乞に御盃頂戴仕度といひて、

備前守は小姓衆に酒盃の用意を命じたるに、頼房が此忠言に心肝を貫かれ、小納戸衆に命じて日頃用ゐたる伊達拵への腰の物衣類等悉く取出さしめ、備前守の面前にて、小姓の輩に殘らず分與なし、其上、脇差の鍔元くつろげ、小刀を以て金打し、向後の行跡急度相改むべしと備前守に誓ひたりとなり。扨て又城中にては、備前守の申條並に退出の由を上聞に達したるに、將軍微笑して、備前守左樣の心得にてあらんには、賴房の行跡は必ずや改まるべし、喜ぶべき事なりと語られしとぞ。

以上の逸話は以て彼の三家老の剛直にして尊貴に阿らず、家康附托の命を重んじて、よく其職責を全うしたる忠肝義膽を窺ふに足るべく、また家康の其子を敎育するに當りて保傅を擧ぐるに、其人を得て、かくて天下の三鎭の重きをして益々重からしめ、三百年の覇業をして其根底より牢うしたるの識見を量るべし。

ながむれば有明の月にかげみえて
いづちゆくらん山ほとゝぎす　後德大寺右大臣

二宮尊德先生逸事中の逸事

相馬の人、福田某翁、齡まさに八旬餘。二宮先生の、野州櫻町の陣屋に居られしころ、翁あたかも、浪人して、櫻町の陣屋に、力役してありければ、能く先生を見知れるよしなり。吾このほど歸省の折、翁に逢ひて、圖らずも、先生の逸事ども、數多聞き得たれば、報德記などに見えざるふしを、二ツ三ツ記さん。　福迫生

金次郎先生は、常人よりよほど丈高く、色澤よく肥大り。容貌も至て柔和にして人づきよく。當時の御役人風の所は少しもなく、寧ろ商人躰なりき。

平生寡默にて、重き役向きの外は、めつたに口を開くとなかりき。前々役人共に、よく申含め置きて、自からは指圖する事なかりき。横田仙次といへる侍、不斷附添ひて、萬事の意を承け、入るも出るも、嘗て離るゝことなかりき。

外出には、必ず草鞋にて。服裝は殊の外粗末なるものにて、(翁此時余を顧みて)君のよりもまだ〳〵粗服なりき。

所々の陣屋〳〵より、仕方（救濟法）を願ひ出るものありとも、其重き役人にさへ、先生は決して面會せられず、前方より充分吟味届き居しと見え、どん〳〵穀物を送り届けて、其後先生自から其所に向かはれ、百姓の重なる心得、稗、粟などの作方等を示されたるものなり。

奥方は樣子上品の方にて、至つて立派なりき。卑き者にも、いと親切に、細々と對話せられ、よく面倒見られたり。息女は我相馬に來られたる人なるが、夫人よりも先生に肖て、大きなる方なりき。

先生の綿密なるは、驚くばかりにて、平生の日記は、一室に堆き迄滿ち、中には一日一日の、朝より夕迄の天氣模樣さへ細かに記し置かれたり。

先年、みまかられたる、富田久助氏（報德記の著者）は我相馬藩の金次郎先生とも、いひつべく、領內の仕方は、此人先生の敎によりて、立てられたるにて、先生は一度も相馬へは來られざりき

大坂の慈善事業　（二）

◎帝國慈善女學院　（南區安堂寺橋二丁目六十六番屋敷）

明治二十四年十月愛岐兩縣下震災の際に創立したるものにて、其目的は天變地災其他不測の慘害に罹れる無告の女兒を養育し、裁縫編物等女子相當の敎育を授くるに在り。資本は同院の元資補助積立講員寄附金及一般有志の寄附米金を以て、之に充つ。創立の當時は伏見文秀女王殿下を總裁に推戴し奉りしも、其後御辭退あらせられ今は田中嘉藤治氏總理の名義にて、諸般の事務を處辨し、主事は岡飾外氏なりき。創立の時より今日迄取扱たる院生の總人員百二十八名にして、此內旣に退院歸國したる者四十八名、他家へ養女に遣りたる者二十七名、死亡者十一名なりきと云ふ。

◎大坂愛育社　（事務所　南區東新五屋町、育兒養生所　堺市車の町東三十一番屋敷）

兩親を喪へる孤貧の兒童棄兒等を集めて保護養育し相當の職業を授け自活の道を與ふるを目的とす明治十九年十一月の創立に係り、後同廿九年二月堺愛育社と合併し、事務所は大阪に、育兒養生所を堺市に設く。其費は府下一般慈善家の贊成を得て、其義捐金を募り、之に臨時の寄附を合せて支辨することゝし、一箇年凡そ二千圓內外の收入あり。現在養育する所、乳兒三十三人稚兒二十人工業に從事するもの十六人、學校通學者二十三人あり、授業の種類は本人の選ぶ所に任す。社員は大坂堺兩地の實業家にして、幹事は井上治次郎、河田日同氏等以下十名あり施療醫は醫學士上阪實照、廣岡修造、町田禹太郎の三氏なり此他庶務係工業係看護長看護人等若干ありと云ふ。

猶前號に掲載したるものに就きて些か誤れるを正し、且つ補遺する處あらん。

◎**私立感化慈救院**　は北區川崎二百番屋敷なり。

◎**大坂婦人慈善會**　は明治二十一年九月の創設にして爾來毎歲一回寄贈品販賣若しくは名家の珍器展覽會等を開き、其收益は陸軍恤兵部、郡司大尉千島開拓隊、二十七八年役及び臺灣役戰死者等に對して、金品寄贈の費用に充て、三陸海嘯遭難者救恤金にも支辨せり。此總額千五百五十圓なりとぞ。昨月にも印度飢饉救濟義捐

捐の爲めに同會を開きたり。

◎慈善新報社　は北區玉江町一丁目百二十一番屋敷に在り。明治二十七年八月の創立なり。新報は專ら忠臣孝士節婦義僕又は公益を興したる人々の事蹟を掲げ、若くは薄命者の情況を記して一般忠孝貞烈の志氣と慈善心とを喚起するに在り。且つ新報販賣の利益と慈善家の施與とを併せて貧困薄命の者を救恤するを目的とす。二十九年下半季中慈善家より同社救護費中へ寄贈したるもの白米十二石九斗五升七合、衣類百九十九點、藥品百八十五包、餅一万六千六百五十箇、雜品二百二十點、又薄命者を指名して寄贈を委託し來せるもの白米六石四斗金二百六十八圓十四錢、衣類雜品百二十四點、救護せしもの年齢十五歳未滿男二十四人女三十九人、十五歳以上男八十九人、女五十七人、此内終身救護男一人女四人あり。同社は社務いよ〳〵繁昌して、京都、名古屋、鳥取の三ヶ處に支店、代理店を有せり。

◎大阪慈惠病院　は東區粉川町三番地に在り。慈惠會長は平瀬龜之輔氏なり。明治二十一年設立以來、昨年十二月末までに同院にて施療を受けたる患者數は九千百九十人、現今取扱ひの患者は百十八人なりといふ。

〇果實の料理法

◎胡桃豆腐を製するには、先づ胡桃實の上皮を去り、擂盆に入れて能く擂り潰し、之に水を切りたる豆腐を入れ、能く擂り合すべし。尤も少許の葛粉を加ふるを可とす、而して鍋中に入れ能く煮詰めたるを切溜に布をしき、其上に流し暫く冷して後料理に用ふべし。

◎梨子羊羹を製するには、上等の梨子を撰び外皮を去り、果肉のよき處のみを「ワサビオロシ」にて卸し、之を擂盆にて能く擂り、絹篩にて濾し、寒天を和かに煮とかし、右の梨子を投し、箸を以て能く攪拌し文火に掛け、而して上等の砂糖と燒鹽にて味をつけ煮詰るなり。

◎柿子羊羹を製するには、ツルシ柿の核子を去り、能く擂り潰し、前の如く絹篩にて濾し、寒天を加へ製すること前法の如し。尤も焦げ付き易きものなれば注意すべし。又熟柿にて製するも可なり、但し少許の砂糖を加ふべし、其他梅柚子等を羊羹に製するもよろし。

◎柚子味噌を製するには、成熟したる柚子を取り、其蒂の上五六分を切りて蓋となし、先づ果中の中身を拔出して空虚となし、別に味淋酒と味噌とを和し、之に胡麻、胡桃、生姜、栗等何にても思ふ品を入れて能く攪き交ぜ、之を前の柚子に詰め、蓋を載せ火上に置き、靜かに煮れは柚子の皮大抵焦げる頃に至れは味噌湧き出づ。此時之を火より下す。或は味淋に柚子の酢を入れ、又は鳥肉鷄卵等を入るゝも甚だ可なり。

◎柚子醬を製するには、先づ成熟したる柚子を二つに割り、中身を取除き、外皮を味淋酒と醬油を合したる中に入れ之を煮立て、砂糖を加へて食するなり。但し其甘酸の度は各人の好に應じて調和するものとす。

◎柚子醬油漬は、其の皮の黄色に熟したるを取り、之を二つ切となし、核子を去り、小口より薄く切り、少しく乾し醬油に砂糖を加へ、味淋酒を按排し、二日間程浸漬して食するを最も美味とす。又柚子煮を製するも味よろし。

◎柿子の白和(しらあへ)を製するには、先づ澁柿の皮を去り、細に刻み、酒鹽に暫く漬け置きて後、取出し、能く水氣を乾し、而して豆腐に砂糖を加へて、能く擂りたるに之を和ぐるなり。

◎栗子の芋和(いもあへ)を製するには、先づ栗子の外皮を去り、熱湯に投して能く沸て上げ、冷却後に澁を去り、大栗は適宜に切り、水氣を乾し、而して甘藷を燒き、外皮を去りて、擂盆に投し能く擂り潰し、之に少許の砂糖を加へて和ぐるなり。

◎胡桃の甘煮を製するには、剝きたる胡桃の上皮を去り、其儘醬油と砂糖を加へ、之を水飴にて煮詰るなり。

◎梨子の甘露煮を製するには、梨子の外皮及び梗を去り、少しく湯で上げ、又別の鍋中に蜜を投じ、漸々煮立て能く沸煮したる時、右の梨子を入れ、暫く又煮立て後之を取出して再び白砂糖を加へ、念入れて煮詰るなり。

◎梨子菓子を製するには、能く皮を剝き去り肉を薄く切りて、炙り乾すときは美菓となるなり。

◎梨子を蜜漬になすには、中熟の梨子を取り、更に疵なきものを選み、皮を剝き暫く水中に浸漬し置き、果中の甘酸液分脫去したるを取り上げ、水氣を乾し、又之を蜜中に一週間浸漬し。蜜汁のよく滲入したれば、磁甕に入れ、又充分に蜜を注入して口を密封し、暗所に置きて數月を經て、食する時は味甚だ美なり。

◎山椒の實を料理に供するには、先づ其の實の半熟にして堅固からざる際に取り、一夜水中に浸漬し苦味を去り、水氣を乾して桶に入れ煮立たる鹽水を以て漬け置くなり。又梅子と錯交して漬け置くときは、兩品共に味よくなるものなり。

◎梅酒を製するには、先づ梅子の青色なるもの即ち酸味最も盛なる時に採收し、清水にて能く洗ひ、別に十度以上のアルコール一升に、白糖一斤を混和したるものを壜中に入れ、其中に青梅一升を投し、密封し置き、百餘日を經過して飲料に供すべし。又其梅には取出して砂糖漬となし置けば、最も美味にして茶菓に供するに宜し。

◎午蒡にて茶菓を製するには、能く洗ひて皮を去り、二寸許に輪切となし、又之を横に小片に切り、白湯に投し又冷水にて洗ひ、而して梅酢と白砂糖にて煮詰め、汁氣なきやうにして焙爐にかけるか、又は陰乾して堅くするもよろし。

（日本園藝雜誌）

隨感

馬丁の親分

余が甲州に遊びて御坂峠を越したる時、乘合馬車に乘りしとあり。時は早や例刻に後れたるゆゑなるべし、問屋には只だ馬車一輛のみ遺りて馬丁は皆な出ゆきしあとなり。行客三人便あし〻と嘆やきつ〻ありしが、余の到着せしと機會となりて、左らば殘る一輛を出し、馬丁は無くとも如何にか都合すべしと言ひたる大入道の男あり。余が前に突立ち、無作法の

挨拶せしが、一見するに如何にも面白き風なり、何となう見覺ありと、よく〱見れば、笑ふべし、彼は石版畫の大西鄉が獵犬を牽きて山に狩する時の風骨相貌に似たる也。彼男は古びたる絹の袷を着、三尺帶を太とくまとひ、五分苅の大入道にて、無頓着に物言ふ。暫時、馬車の準備せしが、いざ宜しとの事ゆゑ、吾等四人例の如く乘移れば、馬は忽ち躍つて四五間はね廻れり。大入道は、喫驚し、車内の一婦人は絕叫したり。やうやく轡を制めたるが、旅商らしき往來の人を呼びとめ、轡を執つて彼方に誘へと言ふ。商は恐恐ながら轡を執り無理に彼方に向けんとするに、其の工合の惡ろしとて、大入道は一二言注意せし後、大聲激語して之を罵しりたれど、急喝の調子何となく可笑味あれば、人々只だ笑つて聞くのみなりし。扨て少しく驅け出して車輪轆々たる時、彼男は得意らしく車内の客を顧りみて曰く、此馬は至つて温和しい奴で、タシラの内では一番善いのでガスと。言未だ了らざるに、馬は頸を右に傾むけたり。大入道鞭を揮つて輕く打てば暫時、頸を直して復忽ち右に傾けたり。而して、車聲三々五、轆音自から調

を失し、乘り工合何となく異樣なり。大入道も亦た首を傾け、ハテナ〳〵と思案せり。

時に車中に一人の客あり、年配四十五六、此の往來に慣れたる馬車通と見えたるが、大入道に聲かけて、何んだか調子が變なり、あのやうに頸を傾ける筈はなかるべきにと言へば、大入道は一層心配の樣を爲し、忽ち車を止めて飛び下り、左右を眺めつゝありしが、コレ〳〵、コレダ、一方の鎖が長過るからだと發明して大いに喜こび、路傍の或る家の婦人に迷惑させて細引繩少しを貰ひうけ、短かき方に續がんとあせるを見て、車中の博士亦聲かけ、長き方の鎖を一つ外づせば宜しからんと注意せしに、チー、ソウダ〳〵と忽ち贊成して左樣に取計ひ、之でこそ大丈夫なりと飛乘り、揚々聲かけて馬を叱す。此間、馬は遠慮なく細引くれし家の門前に小便を流せり。かの女は、細引を取られ、小便まで流されしが、この大入道は禮言ふとも知らざる躰にて馬を叱して進ませたり。旦那！、全たく鎖のセイだつた、之で大丈夫だと、餘程の滿足らしく見えしが、一二町にして亦又馬は頸を傾けたり。大入道も亦た首を傾けて無言となれり。かの博士も亦思案せり。

時にかなたより來る旅人に大聲かけ、兩方の鎖は好いかナと問ひて旅人を驚かせしのち、大入道の忘れたる躰裁は如何にも殊勝らしく見えし。

彼は亦又飛下り、切りに見まはせしが、ふと馬の目かくしに注意し、其の左の方のが下りて、恰かも眼中に觸れ、痛く之を刺しつゝあるを見て喫驚し、ヤ！、このせいだ〳〵と言ひて、目かくしを取り見れば、馬の左眼は眞赤となりて涙をポロ〳〵落し居るより。大入道も亦た泣く計りになりて、可愛相に、この勢だつた、旦那、此の勢だつた、涙をこぼしてると鼻をつまらせる程に車中の博士に語りて同情を乞ひつゝ、目かくしを直し、再たび車臺に上りたり。

此度こそはと思ひしに亦もや頸を傾けたり。復下りて一方の車を直し、此にて宜からうと言ひしが、倘宜からず。又亦下りて鞍を直し、次は又手綱を直し、幾度か下りては上り、上りては下り、其都度、車中の博士と相呼應して、或は新發見に悦び、或は効なきに失望し、或は罵しり、或は聞き、或は落膽する爲躰、如何にも無邪氣にして一種の痴態を存せり。車中の婦人は不安禁ぜざる躰なりしが、余は獨り可笑味にた

へず、微笑して事の面白きを樂しめり。
斯の如くして幾度か車を止め、又馳せ、凡そ一時あまりにして一里の道をも得ゆかざりし時、かなたより馬背に跨がり、鐙なければ大の兩足を宙に踏張り、どてらを肩にかけて、鼻歌うたひつゝ、緩く來る不男あり。こなたの馬車を見て馬をとゞめ、車の近づくを待ちつゝありしが、大入道は忽ち呼かけて、何やらん其仲間同士の奇聲を發したり。
近づける時、大入男はホッと手綱を投下し、吉ヤ、己は弱つて仕舞つたゾ、どうしても馬が頸を曲やがると、訴ふる如く不平を言へり。吉と呼れたる彼の不男は則ち馬より下りしが、大入道は途中の一伍一什を悉く語り、或は馬の目を見せて眼中の赤くなれるを告げ、或は鎖の長短を較べしよしをも語りて手落なき筈なるがと辨ずる如し。かの不男は年配五十にして、大入道はまだ三十恰好なり。然し乍ら、大入道は親方にして、不男は見分と見えたり。見分の不男も亦た無作法に聞居るが、忽ち鞍の置様の正しからぬを見つけて、ナンダ親方、此の勢ぢやないかと發見せし以來、散々に親方を叱れり。親方の大入道も顏色なく、ウー、吉ヤ、サウカ、ウー、サウカと、只管ら閉口し、笑ふ如くにも、困る如くにも閉口して弱り居たり。

ソレヂハナー、吉、テメー、此から行かと言へば、吉は元より、親方に任せられぬと云ふ見幕にて、昂然として責任を負ふらしく。ウー、親方、オメーは、己の馬に乘つて歸んネー、何か乘せて行くベイかと言へば。イヤ、オメーのどてらを持つて行くベイと言ひしが、寒いとイクネーカラ、持つて行け、ソレニ、ナ、吉、コゝニ金があるから持つて行け、ナ、吉と言ひつゝ、己が太き首にかけし蟇口の金入をはづして、吉が馬の用意に忙がしき後より其首にかけてやり。ソレニ、ナ、吉、ケヘリに澤山、お茶菓子を買つて來いヨ、ナ、吉と言ひふくめ居りしが、すべて此等の事は二度ほど宛、くり返して言へば、吉も返辭する如くせぬ如き內に、矢張り返事して無造作のうけ答へは爲しつゝありし也。
既にして用意了れば、吉は、今まで半分聞ながら仕事せし、半ば土だらけの手にて、己が懷中より竹の皮づゝみの菓子を取出し、だまつて親方にわたし、土產に持つて歸りしとの意中を無言のまゝに通ずれば、大入道も無言のまゝ悅ぶらしく

受取れど、矢張り不愛相に受取り。ソレヂハ、吉、早く歸れよ、お茶菓子忘れるナヨ、ナ、と子供に言ひ聞かせる如く注意する此の大入道は、さきに馬の扱ひ方の悪しゝとて、彼の子分に大層叱られしもの也。

斯て馬は此度は元氣よく駈け出るに、親方は吾等に禮するをも知らず、たゞ突立ちて、樂しげに、馬の走る、吉の手綱さばきの上手なを見とるゝもの、如し。車中の博士も顏色なし。かの婦人、此度は餘程安心せし如く見ゆ。

余は獨り首を垂れ首を傾むけて落涙せり。世上堂々たる政黨の人あり、威儀嚴然たる師弟の庭あり。而して、相愛し相信ずる彼等親分兒分の如きもの多くありや。人は言ふ、馬丁なり、馬車屋の親方なりと、何んぞ之を輕んずるとをのみ知つて、之に學ぶとを知らざる。彼等が互に愛するは、互ひに信ずるが故なり、互ひに信ずるは、互ひに生命を托すれば也。誰か言ふ、馬車屋の人物也と。史家記すらく、漢の高祖は旅籠屋の亭主なりしと、余は風雲の際、かの大入道等の類の能く事を成し得る所以を思ひて、涙禁ずる能はざりし。

文藝

手紙したゝめやう

かもめ

◎英國の文學者の某といへるが、もし英文の最も美しきものを求めんとならば、郵便局に赴きて、一束の手紙を携へ來れといひしとか。さなり、飾りなく、詐りなく、心のまことをうつし出して、而も意義明瞭なる文章は、消息文に過ぎたるはなく、これによりて又、其人の性質品格の眞打の處を認め得らるべければ、外國にては、有名なる人の死後に、其人在世の間の父母夫妻諸朋友との往復の消息を取りまとめて出版し、傳紀の足らざるを補ふと多し。

◎扨て手紙、消息といふもの、元來我心の有りの儘を書き付けて、人に遣はすものなれども、さればとて、人との交際上の禮義は、いつとても缺くべからざるものなれば、手紙の認め方にも、いろ〳〵の規則は、古へより行はれたり。其規則どもは今となりても、よく〳〵參考し、止むを得ざる限りは

其儘に從ふがよし。また我國のみならず、西洋の手紙の認め方なども、樣々と六ヶ敷法則のそなはり居るなり。

◎維新以來、國家の變態と共に、國文の上にも大影響を及ぼして、それが爲めに、手紙の文言の如きも、甚だ亂雜のものとなりて、古風の雅致を失ひ殊に年若き人の手紙には、「豈に何々せざるべけんや」など丶漢文脉のがあれば、「何々にてこそありしか」など丶和文脉のもあり、中にはまた「其事が實際にてありし」と洋語の直譯風なるがあり、漢語と和語と英語とが、參差交錯せるもあり。女子の手紙といへども、此弊に陷りて、かの艶々しくやさしき古へぶりを失ひたり。近來女子の文章の女子らしき特色を帶びずして、男子のものと相撰ぶ處なしといふがあれど、手紙の文すら如斯きに、ましてつくり構ふる節多き文章のさなるは、素よりの事ならでやは。

◎されば、いま手紙の文をいかにせば、最も雅致ありて、美しきか。男子は漢文風をとり、女子は和文風を採るべきかといふに、漢文のゴツ〳〵したる、和文のノンベンダラリなる共に通俗の手紙には宜しからず。要するに鎌倉以後德川時代の男子の文、女子の文のいづれも通俗に用ゐられたるを手本となさんには、なだらかに、趣ありて、いとゆかしき消息文を得るに適かるべし。

◎消息文は簡にして意通ずるを貴ぶ、例へば、彼の鬼作左と呼ばれたる、家康の臣本多作左衞門が、其妻に與へたる、

一筆啓上火の用心おせん泣かすな馬肥やせ

の極めて簡にして、意甚だ通ぜる、また大閤秀吉が淀君に贈りたる、

その後文にても申候はで御心もとなく思ひ〳〵わかぎみいよ〳〵大きくなり候やそこもと火のようじん又はしたゞ〳〵までみだれになきようかたく〳〵申つけられ候はんこと〳〵せん一にて候二十日ごろにはかならず參り候てわかぎみだき可申候そのよさそもじたもそばにねさせ可付候せつかく御まち候べく候かしく

かへす〳〵わかぎみひやし候はんように申つけべく候なにかにつけてゆだんあるまじく候

おちやゝ　　まゐる　　てんか

といへるの繁ならずして、情頗る濃やかなる、以て模範となすべし。然れどもあまりに簡ならんとを欲して、却て意義通じ難きものとなるはよろしからず。要は理義の通達するを旨として、冗漫なるを省くべし。

◎然れども亦むだごと、戯談も、親しき中の語らひには、情をあたゝむるの料となるものにて、睦言といふも、別れ久しき後にあひての積る言の葉も、十中の八九は、用でもなきよなれば、これをいふが親しき中の樂しみなるが如くに、手紙も亦内々の親しき人へのは、戯談も交じへ、むだともいひ、昨日かやうの事のありし、今日は何々をしたり、明日は何所へ往かんと思ふなど、いはでもの事も云ひて、情味十分にこもれるものとなるなり。

◎拜啓暑さいよ／＼きびしく相成候所皆々樣御機嫌克御暮しなされ目出度存じ申候と書き初め、それより自分の壯健なるよしをいひて、陳れば何々と用事を書き終り、恐惶謹言、あらあらかしくと結ぶが、手紙の常例なれど、いつがいつとてもこれにてはいと興なし。あまり親しからぬ向きなればこれにてもよし、されど親子兄弟夫婦の中にて、たゞ用事ばかり述べたる味もなき手紙は好ましからず。西洋人の親しき中の手紙には、猫が犬がどうしたなどいふ事までも書いて、文に興を添へ、情の濃やかなるを得るは、習ふべきふし多し。殊に女子の手紙などはザッといひ流したるよりも、情を籠めてあれよこれよと細かにいひたるはゆかし、されど表向きの手紙は、必ずや簡にして意明かに、文脉嚴格にして禮義正しく又た媚びざるを要とすべし。

◎手紙の書き出しの拜啓、一筆申上などいふは、人に逢ひて、まづ頭を下ぐるの心持ちなれば、必ずあるべし。されど極めて親しき中にはなくもよし。また始めに双方の起居平安の狀をいふきまり文句は、毎々の手紙にはなくとも、文中其意自ら通ぜんことこそ望ましけれ。

◎されど手紙に冒頭なきは、親しき間柄の私向に限りて、表向に禮儀を正したるには、不吉、凶事の手紙の外は、必ず冒頭あるべし。

◎文の發端より、打つけに人の名をいふは、凶事の知らせ、又悔みの文に限る。

◎貴人に遣す年始狀の發端には改暦、新暦、新春、年甫などいふ、しやれたる言葉を用ゐず、たゞ改年と書すべく、また御慶とはいはず、御吉慶と書すべし。

◎一筆啓上致候といつて、直に然ば、左樣に候へばとかくは不可なり。此語はたゞ文中のやすめ詞にして、發端よりやす

め言葉を用ゐるはよろしからず。
◎貴人には如何に入魂の間柄なりとも、當方の無事息災を述べ、御安神被下度など必ず書すべきに非ず。
◎目上には差上申度と伺ひてかくべく、同輩には進上仕候、以下には進上致候と書くべし。凡て奉ると仕るとは同輩以上に用ゐ、致は同輩以下に用ふ、又貴人には、「被爲遊」同輩には「被成」、目下には「せられ」を用ふ。
◎進物賜物共に、御ひとへ物二、御かたびら三など〻書くべからず、御帷子御單物五と書くべし。單物は正服にあらず、帷子は正服なれば上にかくべし。
◎自分の病をば折節病氣に罷在と書くべく、所勞に罷在など書くは自らを尊めたるにてわろし。
◎先日とは前三日の中をいひ、それより過ぎたるは先度、最前など書くべし。
◎明後日はなど〻書くべからず、明後幾日と書くべく、又目上には、明日幾日と書くべし。
◎何によらず御用仰せらるべくと書くはよろしからず、相應の御用仰せらるべくと書くべし。

◎御本望の至り、御滿足可被成など〻書くは、これより段々と出世すべき人、例へば學校を卒業したる人などを祝ひて書くべからず。
◎且又雖樣とは書くべからず、且又はかりそめの義なれば疎畧なして、然ば誰樣とかくべし。
◎少の音物を目上の人より賜はりたればとて、冥加に相叶ひ生々世々有難御禮難申盡など〻、ギヤウ／＼しく尊敬の言葉を陳ねたるは、甚だしく飾るを以て、却て失禮となるべし。
◎目上の人への進物に到來に任せなどいふはあまり好ましきとに非ず。有り合せものを送るやうにてわろし。
◎然ば將又、且又等同字二所に書くべからず、外の詞に替へ書くべし、可被下、可被成、奉存候等も文一通に三箇所も書くは拙なり。よし長文なりとも隨分書きかふべし。
◎貴答に及ばず、御返事におよばずなど〻貴人にはいふに及ばさる詞にて、却て失禮なり。
◎御尋ねに預り忝く存し候とかくは、尋ぬるとは知れぬ處を探がす意あれば、隱れなき我家なりとも卑下してかくいふべし。人の事に御尋ね申など〻書くは慮外なり。

◎候より、御坐候、申上候、仕候などいふは、いと手紙の文字を和らぐるが上に、禮義正しきをも得るなれば、必ず用うべし。例へば「感謝の至に堪へず」などいふよりは「厚く御禮申上候」といはんは、禮義ありて、且おだやかなり。されどあまりに多く候といふ文字を用ゐて「此候は誠の候にては無之候次の候が誠の候に有之候されば此候は全く餘計なる候に御坐候」といふやうなるはよろしからず。候文字昔は極めて多く用ゐたり。

◎結尾には恐惶謹言、匆々頓首、敬具などは目上の人に用ゐ同輩には、頓首、草々など用ゐ、目下には不一、以上など用うべし。以上といふは、もと口上狀などの畧式に用ゐたるものなり。女へつかはす手紙、また女の文には、あなかしこ、かしこ、あら／＼かしこ、草々かしこなどなり。めで度かしくと書くは元來誤まれりと雖も、用ゐならひたれば、強ちに不可なるにてもなし。もと／＼かしくとはかしこの訛なり。一に某頓首誠恐謹言、二に某誠恐謹言、三に某恐惶謹言、四に恐惶謹言、六に謹言、七に之狀如件と其人に從つて書き方に差等あるよし、或る書には見え、また以上とは箇條多く書いたる奥に書く、一ヶ條の時には書かず、目録などども同じとの事なり。

◎月日は、年までかゝずともよし。たゞ日ばかりなるも女の文にはよろし。我名も人の名も女にては姓名ともに書かぬがよし。姓のみか、名のみかなるべく、明に姓も名もいひたるは親しみに過ぎたらんやうなり。

◎昔は殿といふ字を多く尊稱に用ゐたれども、今時は極めて貴きか、または目下ならば殿の字の書體を別ちて書くべし。されど同等及び以上には様の字最も穩かなり。女文には殊にしかり。

◎先方の宛名數人、當方の署名數人なる時は、年輩、長幼、尊貴の別に從つて席次を異にすると左の如し。多く誤まる人あり、よく／＼心すべし。

孫(一)
子(二)
父(三)

月日

(一)父 様
(二)子 様
(三)孫 様

◎封袋の上書は之に反して

(一)父 (二)子 (三)孫
(一)父 様 (二)子 様 (三)孫 様 各位

と書くなり。

○先方名宛の脇には男子ならば侍史、執事、座右、硯北など書き、女子ならば御前に、御許に、人々申給へ、人々御中、御文机の許に、まゐらすなど書く。侍史、執事、人々申給へ人々御中と書く意味は、先方貴き故、他人の取次を乞ふ意味なれば、親しき中には用ゐず。また本文中の名宛に脇書せぬともあれど、状袋の名宛には必ず之を書すべし。親剪、親披平信などは状袋の上にのみ書くなり。惣じて堅くるしき文字を好まぬがよし。昔は進上何某殿、謹上何某殿と書きしが、後世脇書となれるなり。

◎名宛の後に追啓(尙〻書)をかく。之を書くには、本文よりも字頭を下ぐべし。昔の手紙には、尙〻書を添へねばならぬもの〻やうに思ひて、もし書くことなければ、たゞ尙々とのみ記し置けり。さる虚禮今や用なし。

◎古法にては、貴人の宛名は墨こく書かぬともかくれなく、またたしかにわざ〱と書くは憚かる心より、墨色薄く書くを貴びたれども、今様は凡て宛名は封筒の眞中の上より、楷書に正しく書き、肩書は少しく小さく右の肩に、脇付は左の中

程より肩書と同じ程の大さに書く。自分の名は裏面の中間より下に行書又は草書にて書き、右の肩に月日、住所を認むべきなり。

◎昔は書状を封ずるに、色々の法式ありて、紙捻にてくゝりたり、または結びたるもありたれど、今時は上下おしなべて状袋を用ゐれば、煩はしき事もなく、袋の口の糊して、そこに封、緘、〆など書き、または緘印、見留印を捺すべし。女は〆を専ら用う。また㐅、めとかくとあり、〆、㐅、めの由來につきては色々の說ありて、或は行字の變したるなりといひ、または卜の字の畧なりともいひ、或は弗の卯字の誤まりなりともいふ。孰れか是なるを知らず、されど封の字の代りに墨を引くに、其初め何人か都合よきを取りて、〆、㐅、めなど書きたるが習ひとなりて、中にも〆最も行はるゝことなれるならん。また女文に壽をかき、また、いもと書き、また壽にいもをかくるもあり。元來墨を引くといふは、白紙のまゝにては、不吉故なり。

◎西洋にては、状袋にゴムの引きたるは、唾をつけるによりて、先方に失禮となるとて、キチヤウメンなる手紙には封蠟

を溶きて附け、其上に印を捺す。されどこれは段々と廢り行くとか。

◎書簡は常に手にもつて、達者に書き習ふべし。机にて書きならへば書列いつまでも艶なし。文言は卷紙の天地を明け、地は餘計に明けて脚を揃へてかくべし。されど女の文には天をそろへて、地を亂したるもゆかし。昔は女の消息文を藤花樣、立石樣、雁行樣に散し書きしたるあれど、散書今時はあまりに煩はし。又文言の前後には必ず多くの餘白を殘すべし。

◎字躰は惣じて行書または艸書を用ゆ、されど目上の人には必ず行書なるべし。

◎文を書くに、墨つぎは、法則をいふもあれど、まづ筆に墨のある間書きつゞけ、きれてつぐやうにすれば、書き風見苦しからず。べた〳〵と墨くろき、また墨づきの位置のそろひたる、見にくきものなり。又今樣は手紙を書くに、西洋ぶりに眞似てか、幾章にも起頭を分ちて書く人あれども、同じくは古へ風に一章に書き流したるがゆかし。

講義

豆腐の話

郭北耕夫

◎大豆は日本人の常食の多分の材料となる、味噌、醤油、納豆、豆腐、豆腐皮より、豆粉、煮豆、菓子の類に至るまで、之を需用すると夥だしく、されば本邦の農業副產物中第一に位し、其產額も一年殆ど四百万石にも上る。而して產額の最も多きは埼玉茨城にして、各々二十万石以上を產し、之に次ぐは宮城、岩手、福島、長野等の諸縣なり。されど全國到る處に之を產せざるはなく、中にも東北地方より良品を出すとぞ。

◎大豆の蛋白質に富むと、頗る多量にして他に其比を見ざる計りなれば、滋養品中甚だ重要のものなり、日本、支那、朝鮮人等が、之を貴んで、多くの食品となすも宜なり。

◎扨て今、大豆より製造する食品中、最も重なる豆腐に就て先づ其製造の由來より說き出さん。

◎傳へいふ、西漢の淮南王劉安なるもの、支那に在りて、初めて豆腐を造りたりと、眞僞素より知るべからず。支那人は豆腐を呼んで、淮南の仙術などいへば、この劉安なる人は、世を離れて、獨り閑寂隱遁を樂しむの人なりけん。されば其境遇の必要よりして、山海の珍味ならで、淡くして且つ味ひありて、而も滋養分ありて、また製造し易き、此豆腐を發明したるものか、其餘澤は後世に及んで、我國にも傳り、良好の食品を供する次第となりしものか。近來は西洋人なども、いたく之を賞美して、日本人は如何にして、此美味滋養ある豆腐を製造することを知り初めしやなど、訝るものもありとか。

◎宋の楊誠齋の豆廬子柔傳(豆腐傳なり)に達磨大師、豆腐を得て之を梁武帝に進めたることをいへり。素より狂言綺語の類なれば、信ずるに足らず。

◎而して此豆腐なるもの、いづれの世より我國に傳はりしか其年代、今や考ふるによしなし。然れども、思ふに之れ往古入唐せし高僧輩の中の誰人か、製法を傳へて歸朝したるものに非らざるか、精進潔齋の僧侶等の食料として、最も結搆なるによりて、初めは僧家に製造せられて後、廣く民間に普及し、今や、山間僻地至る處として、豆腐屋の無き處なきに至りしならん。

◎或は又思ふに、豆腐は、歸化の支那人もしくは朝鮮人の製造し始めしものには非らざるか。

◎豆腐、味噌、納豆、豆腐皮、みなこれもとは專ら僧家精進に食料たりしものなり。

◎連歌師宗長が手記の大永六年(三百七十年以前)十二月の條に、爐邊に田樂をあぶりて食したるよし見えたり。豆腐の田樂由來既に久し。

◎今の世の田樂と、昔の田樂とは、其形の異なれるのみか、今は春夏秋に之を賞し、殊に初春の木の芽田樂最も嗜まるゝかなれど、いんじは冬の賞翫なりしよし。

◎昔、貧僧あり、田樂を造りて、己れ獨り之を食ひ、弟子には與へざりければ、弟子ざれ言をいひて、これは〳〵、

　今の間に佛は二躰出きたり
　ばうずはやくし我はくわんおん

◎大永に次ぐ享祿年間(大永は七年間なり)の七十一番職人歌合に豆腐賣を詠じたる歌とて

ふるさとはかべのときはに奈良豆腐
　しろきは月のそむけざりけり

とあるを見れば、此時分は、民間にて專ら製造したるものと見え、近畿にては、奈良豆腐なるもの、一の名物として賞翫せられしものと見ゆ。

◎百九十餘年前以前の享保十七年五月に、肥前の大村の鄕村にて、豆腐屋中より、豆腐一丁六文に直上げの願文ありとぞ。此頃は既に普く全國に行はれて既に久しきに至りたるものなるべし。

◎豆腐に鎹といふ諺も、古きよりのものならん。

◎最初は豆の腐るを俟ちて造りしものか、豆腐の名あるは、これが爲めならんか。今は大豆を數時間水に浸して、よくふやかしたる時、石の挽臼にて挽き碎き、後荏胡麻油少許を加へて、泡沫を消し、布嚢にて搾りて、滓を去り（此滓は雪花菜（うのはな◎からず◎かなり））之に鹽膽汁を加へて、植物性の乾酪素を凝固せしめ、四側に小孔を穿てる、角の箱の中に、布を敷きたるに入れ、壓蓋をなし、重き壓をかけて搾ると若干時なれば、爰に白雪を欺くの美しき豆腐は出來て、八百八町はおろか、津々浦々の端までも、朝な夕なの豆腐賣の呼び聲となり、人の口に上るなり。

◎さる山間にては、豆腐を買ふて、繩にくゝり、家に持ち歸るといふは、眞しからぬやうなれども、さる硬きものもありなん。田舍人は概して豆腐の硬きを喜ぶなり。都の豆腐は、箸にもかゝらぬ程に柔かし。硬きは鹽膽水を多く用ゐるが故にて、これ少ければ柔かし。はじめ滓を取り去る際、絹の嚢にて搾りたるは、絹ごし豆腐にて頗る柔に、最も賞せらるなり。

◎昔泉州堺に紅葉豆腐といへるは、かうえふの買ふやうと國語相通ずるを以て、緣喜をとりて名けたるよしにもいひ、また同所の名品の櫻鯛にも劣らぬ味なれば、花に對する紅葉とて、しかく名けしともいへり。今にも折々豆腐に紅葉の形を印せるあるは、堺の流を汲めるなり。

◎淺草瓦町に淡雪豆腐名代の店あり、淡雪豆腐とは、享保の初め淺草並木町西側にて日野屋東次郞なるもの賣りはじめしが、其後湯島切通山内屋權兵衞なるものも賣り出したり。それより所々に此名を呼ぶ豆腐屋出來、今時にも多し、而して

淡雪豆腐を賣る家は、立場茶屋の體裁なるが多しとぞ。
◎唐豆腐、東京目黒にて賣る家あり、笹の雪といふ豆腐は、下谷根岸にて、豆腐一式の飲食店に在り。
◎以上の外異類には、前に云る朧豆腐、絹ごし豆腐の外に、燒豆腐、ツト豆腐、ギセイ豆腐、凍豆腐あり、又加色豆腐とて、綠豆腐、紅豆腐、黄豆腐、黑豆腐、褐豆腐あるよし。
◎凍豆腐は、一挺を八ツほどに切り、籃にならべ沸湯をかけて、極寒の夜一夜外に出して、翌日また湯にて烹やはらげ、浮あがるとき取りあげて少し壓をかけおきたる後、また籃に並べて、幾日も日に曝らすなり、淪湯に山梔子を入るれば、後に蟲つかぬよし。凍らすには夜半より後よろしく、よひはよろしからずとぞ。これは紀州高野山にて古くより製するを以て、また高野豆腐の名あり。
◎油揚にしたるものには、揚豆腐、生揚、雁もどき等あり。
◎豆腐及び雪花菜の成分は、衛生試驗場の分析によれば、左表の如し。

	水分	蛋白質	脂油	炭水化物	纖維	灰分	營養率
豆腐	八八、七九	六、五五	二、九五	一、〇五	〇、〇二	〇、六四	一、三
雪花菜	八五、六六	三、六六	〇、八四	六、三五	二、九〇	〇、五九	三、一

にて本邦植物質食品中の主位を占め、大澤醫學博士の研究によれば、豆腐の蛋白質の消化率は、百中の九十六一プロセントなりとぞ。雪花菜もまた滋養分に富む。
◎豆腐皮(又は湯葉)は初め豆腐と同じく大豆を挽き碎きたる豆乳に、少量の灰汁を加へ、之に黄色を着け、廣き鍋に入れて煮詰めて、膜皮の上面に生ずるに從つて、小さき棒にて、徐に卷き取りて日に乾かすなり。假令は牛乳のクリームの如きものなり。灰は炭酸加里を含みアルカリ性なれば、豆乳に膜皮を生せ易すからしむるなり。豆腐皮また滋養分を含む、されど豆腐よりは消化悪し。
◎本草綱目に曰く、豆腐の主治は中を寛にし、氣を益し、脾胃を和し、脹滿を消し、大腸の濁氣を下し、熱を消し、血を散すといへり。
◎豆腐の異名は、支那にては、大方は單に腐といひ、菽乳、豆乳、淮南佳品、小宰羊、黎祁、方壁といひ、我國、女房のみやび言にては、おかべ、みかべ、しろもの、などいふ。
◎豆腐の和歌に詠せられたるものなし。但し本居宣長が稻掛昭隆といへる豆腐屋の主人の爲によめるみかべの長歌あり。

されどされぱみたるものなり、左の如し。

たふときや　大氣つひめの　神の大御身よ　あやしくもなり出し　まめの　そのまめの　とけてこゝりて　やま川のいはもとゝろに　おちたきつ　たきのみなはの　たへの穂に　なれるおかべは　ときじくに七重花さく　八重花さく

◎發句には之を題としたる尠からず、例令へば

寒き夜にあぶりくふべきおかべかな

の如し。俳文に北七里の豆腐賦あり。其文中に狂歌あり、曰く、

雁鴨は我を見すてゝ飛びゆきぬ
とうふに羽のなきぞうれしき

◎許六の豆腐辯に曰く、

むかし晝とあけ、夜と暮たる時、豆腐といふ物一丁出で、名もなく、類もなく、甲もなく乙もなし、たゞうまきとばかりおぼえたることそありがたけれ。それより小路〳〵に出生して、世々の聖賢に料理せられ、昔豆腐は、石部金吉とてすたり果て、今やうのおぼろめく物を、豆腐の聖とはいひはやらす、云々。

◎明の蘇平の詩に

傳得淮南術最佳　皮膚褪盡見清華　一輪磨上流瓊液　万沸湯中滾雪花　瓦缶浸來蟾有影　金刀剖破玉無瑕　箇中滋味誰知得　多在僧家與道家

といへるあり。伊藤仁齋はまた、

齒搖臼脫百難食　唯覺食中豆腐優　浩博淮南鴻列解　未如斯味厚能柔

と詠ず、此外豆腐に就きての詩には、明の曾異撰、清の張劭のは、有名なり。梁川星巖、羽倉簡堂、藤森弘菴、小野湖山等また此が詩あり。

◎されどいづれも、詩としては見るに足らず、たゞ何となき興をいへるに過ぎず。然るに五月雨の朝、時雨ふる夕などに、豆腐賣の聲をきゝたらん、いと哀れにて、いとゞ詩趣を促がすものならずや。

◎百十六年以前の天明二年五月出版の豆腐百珍といへる書には、豆腐の料理法百種を擧げたり。左に其名目を示す。

尋常品は

木の芽田樂、雉子燒田樂、あらがれ豆腐、むすび豆腐、ハンペン豆腐、高津湯どうふ、草の八杯豆腐、草のケンチエン、敲どうふ、雷霆豆腐、再炙でんがく、凍どうふ、はやこゞり豆腐、すり流し豆腐、おし豆腐、金沙豆腐、ぶつかけ溫

鈍、しき味噌さうふ、ヒリヤウヅ、こくしゆう、ふは〳〵菽乳、まつ蠶れ、梨子豆腐、墨染豆腐、よせさうふ、鶏卵様の廿六品。

通品は

炙豆腐、油煠豆腐、軟豆腐、絹ごし豆腐、油煠田樂、ちくわ豆腐、青豆菽乳、やつこ豆腐、葛田樂、赤味噌のしき味噌さうふの十種。

佳品は

なゝみ豆腐、苞豆腐、今出川、一種の黄檗豆腐、青海豆腐、淺茅田樂、海膽田樂、雪かけ豆腐、線麪豆腐、糟豆腐、いもかけ、碎豆腐、備後豆腐、小竹豆腐、引ずり豆腐、うづみ豆腐、釋迦豆腐、なでしこ豆腐、沙金豆腐、たゝき豆腐の二十種。

奇品は

ふどみもどき、玲瓏豆腐、浮錬の海膽田樂、繭田樂、蓑田樂、六方焦着豆腐、茶れい豆腐、糟いり菽乳、賽香魚、小倉豆腐、縐紗豆腐、方ヒレツス、焙豆腐、鹿子菽乳、うつし豆腐、冬至夜豆腐、味噌漬、さうふ粥、蘇根菽乳の十九品。

妙品は

光悦豆腐、眞のケンチエン、交趾田樂、阿漕田樂、雛卵田樂、眞の八杯豆腐、茶さうふ、石燒豆腐、犂やき、炒豆腐、煮ぬき豆腐、精進の煮ぬき豆腐、骨豆乳、空蟬さうふ、鰕ごうふ、加須底羅豆腐、別山燒、包油煠豆腐の十八種。

絶品は

醬油煠ながし、辣料豆腐、礫でんがく、湯やつこ、雪消飯、鞍馬豆腐、眞のうどん豆腐の七種。

◎なほ豆腐百珍は以上の他に百三十種の料理法を錄して、續編を出すよし、彼本の卷尾には見ゆれど、其本ありやなしや知らず。

◎前にいへる北七里が豆腐賦中に見えて百珍になき、異樣の

名は、空、淡雪、祇園、南禅寺、小笠原、治部、雪の下、松の山、鰻崩、鶴もどき、寺鍋等あり。みな豆腐の異なる料理法なり。

◎昔より豆腐は京都最も名ありて、中にも祇園を優れりとす。同社樓畔の三軒茶屋の田樂は、頗る滋味を供して、藤森弘庵の詩にも上れり。

兒藝

牛坊主

これは夏の事でした、ある日、二人の坊さんが、背中に重げな袋をしよつて、さる山道をば、炎天干しになつて、ほこりだらけ、汗はビツシヨリ　見るさへさも熱さうに、重い足を引きずつて、喘ぎ〳〵、向ふの山際から、チラ〳〵と見ゆる御寺をさして、歸つて往きました。一人は久蓮坊といつて、永の難行苦行を積んだせゐか、目は落ち窪み、頬は細々とこけ、皮と骨とだけらしい軀をして、如何にも殊勝らしげでしたが、外の一人の性蓮坊といふは、前のとは大違ひで、いつ

も甘いものばかり食つて、のら〳〵してゐると見えて、ヅングリと肥え太り、調子ッぱづれの大聲で喋べつたり、笑つたりする有様に、評判の自駄樂坊主とは、一見して知られました。

二人の坊さんは、だん〳〵と歩いて、とある林の端に來かゝりますと、フト見付かつたのは、一疋の牛でした。これは何んでも百姓が薪を伐りに來て、此處へ繋いでおいたものらしい。之を見ると性蓮坊は、いきなり手を拍て、「こりや妙々」と叫んだので、久蓮坊は不意を喰つてビックラしました。性蓮坊は「これは妙だ、これがほんの御利益といふものぢや、なんと久蓮坊、こやつに、お互の荷物を背負せてやらうぢやないか。」といふより早く自分のものは勿論、だまつて呆れかへつてゐる久蓮坊の荷まで、引きおろして、すばやく牛に負はせておいて、牛の綱を解いて、代りには葛羅を一本、そこらから取つて來て、牛にくゝりつけました。それから、どうするとかと思ふたら、自分を自分でに、最前牛の繋がつて居た木に括り付けまして、そしてカラ〳〵と大きな聲に笑ひながら、「こいつは面白い、なんと久蓮坊、其牛をつれて、ズンズンお先へ歸りなさい、歸つたなら性蓮坊は、途中で病氣になつたから、百姓屋へ置いて、此牛を借りて來たと、いつたらいゝよ。わしも明日頃は歸院と致すよ。」

久蓮坊は、性蓮坊が又例の悪戯か、よせばいゝにと思ふたかなれど、兎や角いつて無益な爭ひをおこすよりは、いふがままにして、一刻も早くお寺に歸つて、休んだ方が上策だと思つて、迷惑さうに牛を牽きつれて歸へりました。牛もまた折角涼しい木蔭で一寢入りやらかさうと思つたに、このやうな暑い晝中に、引きずられては、いやはや迷惑だといひさうな顔付をしてゐました。

さて牛の主の百姓は、薪木を澤山に伐つて、林の中から出て來て、いざ牛につけましやうとして見ると、これは不思儀、牛が化けて大入道になつてゐるので、其親爺は驚くまいとか、キヤアといつて腰を拔かして、ものもえいはず、がた〳〵、ぶる〳〵と震へてゐました。性蓮坊は可笑しくて、吹き出しさうになつて堪らぬをやつと耐へて、さも憐れな聲を出して、「これ親爺さん、そんなに、ビックラするとはない、まあ此繩を解いて、私の話を聞いて、お呉んなさい。私はお前に飼は

れた牛で、其牛の私は以前、坊主であつたが、生れついての大食家で、食ふては寢、寐ては食ひ、毎日のら〱、ぐづ〱してゐましたもので、とう〱佛樣の罸が當つて、牛になつて仕舞ひました、それからといふものは、お前に飼はれて、草ばかし食はされ、ビシ〱と逐ひ使はれて、苦しい月日を送つてゐましたに、今日といふ今日、罪滅しが出來たものか、又元の坊主になりかへりました。まことに難有い譯で、南無阿彌陀佛、々々々々々。」といひました。

親爺さんは靑くなつたり、赤くなつたりして、坊主の話を聞いてゐましたが、なんだかえらく尤に思ふて「さうとは知らず、これまで隨分と苦しい目をさせまして、誠に濟みましねえ事をいたしました。どうか御赦し下さい。」と地びたに頭を磨り付けて、恐れ入つて、詫言をいひ、また「先づ兎も角も今夜丈けは、も一度家に戻つて貰ひましやう、切めては、たゞの一度でも人間らしい御膳を上げませんと、この親爺の氣が、どうも濟みません。」と折入つての願ひに、性蓮坊は思ふ坪に當つて、〆たと内心で喜びながら、氣にも見せず、さも氣の毒さうな顔をして、「今迄永の間、養ふて貰ふた御恩の

ありますに、何のそれに及びますものか、しかし折角だから、今度だけ、御願ひいたしませう。隨分體も疲れてゐますので。」といつて、二人共々家に歸りました。

百姓は家に歸りますと、坊樣の御入り、疎末にしてはならぬと、女房や娘が、もてなし振りを考へてゐる處へ、性蓮坊の話を聞くと、今までいぢめた牛が、即ち此坊主だと知つて、恐ろしいやら、勿躰ないやら、切めては今までの罪滅しに、今夜は大振舞をしやうと、家内中大かゞりで、大御馳走を致しました。性蓮坊は、幾年ぶりかの、饗應に預つたので、かう云ふ時が食ひ時だと、食ふとも食ふとも、しつかりこさへた御馳走を、自分獨りして、瞬く間に、ペロリと食つて仕舞つて、ころりと寢かへりました。流石の親爺も此躰に呆れかへつて、少し腹立て聲に「なるほどお前さんも、よく食べなさるな、牛になつたも無理はない。明日は早朝、どこかのお寺へいつて、よつく身を謹しみなさるがよい。此鹽梅で、又ぞろわしらが家で牛にでもなられちや、迷惑だ、イヤハヤ眞平御免だ。」

親爺の機嫌が少々違つて來たので、性蓮坊もやゝ氣味を惡く

し、其晩は小さくなつて一夜をあかし、翌朝起るや否や、禮も碌々にせずに、逃げるやうにして、お寺にかへりました。歸つて來ると、一番に目に留まつたのは、納屋に繋いである例の牛でした。そこで急に思ひついたかの様に、和尚様の處へいつて、あの牛は百姓が、お寺へ寄進につけたいと申して居ましたと、詐をいひましたが、和尚さんはだまされるとも知らず、暫時は其儘で打ちやつて置きましたが、あゝして置いても無益だ、一層の事、賣つて仕舞ふと思つて、牛市のたつたを幸ひ、寺男に連れさして、賣りにやりました。

折も折とて、此日には、丁度かの百姓が牛買ひに出掛けた處が、逸早く先頃まで飼ひ馴らした牛を見付けたもので、何となくなつかしく、急いで其傍にかけ寄り「ヤレ〳〵御可哀想に、又候牛にならしやつたか、エー氣の毒な事ぢや、それだから、いつかも私がいはねえ事ぢやねえ。イヤ〳〵サウ首を振らしつても、私や知つて居ますぞ、お前はあの坊さんだ、それに違ひねえ、皆様まあ聞いておくんなさい、かう云ふ譯でよ。」と性運坊にだまされたとは、まだ覺らずに、大勢の人にも其話をして聞かせました。スルト誰しもこの親爺は本氣の沙汰でないと思つて、「この氣狂ひ親爺が、何をいふとやら。」と、てんでに笑ふやら、嘲るやら、果てはみんなが「爺さんサウいふ譯なら、お前さんが買つていつて、何んにもさせずに、大事にして飼つてやりなせい。」といはれて、根が正直で親切な親爺故、それもさうだ、こんな譯をしらぬ奴等に預けておいては、可哀想だと、一圖に思ひ込んで、一も二もなく、言ひ値通りに買つて、連て歸り、毎日〳〵何もさせずに、勝手氣儘にさしておくと、だん〳〵横着を始めて、悪戯がはげしく、いふ事は少しもきかぬので、流石の親爺が勘忍袋の緒が切れて、それからは以前にもまして、はげしく逐ひつかつたので、其上句にはあまりの虐待に堪へ兼ねて、とう〳〵死んで仕舞ひましたとさ、めでたし〳〵。

許六

◎百合の花は數品多し、笹ゆり、博多ゆり、鬼百合、色は異なれども元來一種にして生得いやしき花なり、たとへば輿車にのれる位なければ、かゝへ帶つよくからげあげ、上づりに腰たかく、あゆみ出たる女に似たり。姫百合は、十二三ばかりなる娘の、後に帶うつくしく結びたるがよし。

◎合歡の花のねむげなるは、深閨の中に雛物をかゝへ、晝眠る女に似たり。其下に晝顔の目を覺したるは、廿にちかき頃まで、男心をしらぬ女の、はゞめて宮づかへに出たる頃の、よろづつきなきありさまならんか。

雑録

護りの天使（本號挿畫の説）

顧みて思へば、幼なき兒等は屢ば危き地に近づくものを、如何にしてか能く恙なきことを得るものにや。草の花の美しきに見とれて毒蛇の巢を侵し、蝶の舞ふに誘はれて絶壁斷岸を踏まんとする都度、何等のまもりありてか、不可思議にも危險は彼方に遠ざかるなり。靈眼の人ありて或る日密かに愛らしき若兒等の後へを窺ひしに、朦朧として氣高き姿の立ちて護るが如きを認め、扨ては斯る有がたき御備へのあることよと感謝の涙にむせびしとぞ。

本圖は獨乙のブロックホルスト氏千八百八十七年に描けるものにして、題してSchutzengel といふ。

けがさじとおもふみのりをともすれば
世わたるはしぞなすぞかなしき　　家　隆

我身にうたふ我聲も
きこえぬ程ぞさわがしき

紡績女の歎

花　影　子

かつて國民新聞紙上に紡績會社の内情を記せしを見て、いたく感ずる處ありしが、彼我故郷より雇はれ行きし數人の少女、殆ど皆肺病に犯されて、郷に歸り相續いで世を去りぬ。うちに我まれる一青年の許嫁の少女ありしが、貧しき父母の唯一子なりければ、少女が父母の胸中さ、かの青年の心情さ思ひやられていたましく、元より顔も知らざりし少女にはあれど、讃度か其墓を訪ひて、袖をぬらしぬ。

鐵の車のたえまなく
　轉りめぐりて富人の
あまる幸のみ引きいだし
　我等の細き玉の緒を
なほもほそれとひきのばす
　めぐる車に連れられて
めぐりめぐりてはてしなく
　心の糸は亂れつゝ
とがむすべなき苦しさよ
　勞れし身をばとやせむと

氣なき色にまよひつゝ

我身にうたふ我聲も
　きこえぬ程にさわがしき
機械の響にうづもれて
　心のうちのしのびなき
いかで世人にきこゆべき
　をり〳〵こゝに訪ひきたる
あて人たちの心なき
　巧をほむるからくりも
我等を黄泉に追ひおとす
　禍神なるを知りますか
なさけを知らぬ世の人は
　我等の罪を責むれども
望なき身のいかにして
　正しき道をふみうべき
ゆくべき方にあらぬとは
　かねて知らぬにあらねども
望なき身の悲しさは
　うつろひやすきうたかたの
果なき色にまよひつゝ
　濁りし水にさそはれて
いつしか渦にまきこまれ
　底なき淵におちいりて
浮びいづべきすべもなし
　隅田の堤を春ごとに
花はかざれど朝夕に
　いとまなき身はその花の
露の惠もうけざれば
　花見の人の心地よく
さゞめく聲も憎らしく
　春の來るさへ怨みなり
朝夕かよふ庭みちに
　小草の花もさきみだれ
軒の雀もたのしげに
　親子むつびて語らふに
四人ならぬめしうどの
　我等はあはれ一日さへ

おのが心のまゝならず
世に捨てられしかたゐさへ
心のまゝに休みつゝ
花にうかれてたのしむを
などて我等に世の人は
泣くひまさへも與へぬぞ
生命をつなぐ世すがなる
業に我等は死ぬるなり
かゝる浮世にあらむより
はやく死ねよと願ぎながら
などて細りし玉の緒を
つなぐ業をばなすやらむ
かくも苦しきなりはひの
報酬はわづか朝夕の
うゑを凌げば殘りとて
きぬの代だになきものを
それさへ常に病める身の
藥の代にうめられて
かへすすべなき負債もて
縛められていでがたく
あゝ死の外の救なし

すみれ

小川の岸にうなだれて
なにを思ふか花すみれ
色もかをりも床しかる
いましが顔をゆく水も
胸にやどして歌ひつゝ
流るゝものを汝はなど
思ひしづみて朝ゆふに
なみだの露にそぼつらむ
我身をめでゝ往く水は
胸にやどして歌ひつゝ
ゆくといましはいふなれど
やどすも唯にしばしのみ
見よはや水は去りゆきぬ

まことにめづるものならば
いかで捨ゆくことあらむ
水に浮世のものなれや
あゝ花すみれかくばかり
心やさしきいましをば
いかでつれなく我つまむ
思の露のむすびゐる
そのまゝ堀りて我庭に
移しうゑても育てなむ
あゝ花すみれいましをば
妹とわれは思ひつゝ

着英後の安井てつ子

（四月十九日通信）

●以下は本年一月官命を帶びて、家政學研究の爲、英國に渡航ありたる女子高等師範學校訓導安井てつ子女史か通信の一端なり。

去月十五日當地クリスト教會の婦人等我帝國軍艦富士艦の水夫をチヤタムなるソルジアー、エンド、セイロアー、ホームに招きて茶菓を饗應せり、恰も此前週バラード嬢予と共に我邦より歸國せられければ、之に關係する人々、日本語の演説を嬢に切望しぬ。

嬢は三四年間我邦に在りしを以て巧に我國語を以て左の演説をなせり、此他尚三四年前我邦にありし某嬢亦我國語を以て簡單なる挨拶をなせり。

數名の當國婦人並に兵士等は或は樂を奏し、歌を唱ひ熱心に我兵士を歡待し、當ホームの婦人は香袋、バラード嬢は懷中用鉛筆及小形寫眞挾みを我兵士に贈れり。

我一士官の挨拶は彼等をして大に滿足を感ぜしめ、年若き一兵士の簡單なる英語の答辭は處柄實に上出來なりき、我等は所望に任せて君が代を歌ひ彼等亦其國歌を唱ふ、かくて我一士官の發聲にて我等一同英國　女王陛下の万歲を唱へしに、彼一士官は直に室の前面に進み來りて吾　天皇陛下の萬歲を三呼しぬ、彼我の滿足云はん方なかりき、我兵士の嚴肅なりしは實に我神國兵士の特質を表し、數ならぬ身さへ肩身の廣き心地して大に愉快を覺えぬ。

元來此ホームは演説中にもあるが如く國家の爪牙たる兵士を慰撫するを目的とし主として婦人を以て組織せられ兵士にバイブルの講義、其他の學科を授けて、之を慰撫するの傍、善道に導き、下等なる快樂を取るの惡習を防ぐ、實に善事ならずや、而して各國の軍艦此地に來る每に、かく饗應して之を慰むと云ふ、予は實に此席上に於て感じぬ、我邦婦人をして是等の婦人に代らしめば我兵士をして一層の感情を暖めしむるを得しならんと。

當國婦人の事業獨り之に止らず、或は寡婦孤兒を慰撫し、貧民の疾苦を防ひ、或は墮落女子を救濟するの道を講じ、自任無報酬の業務は是れ神に對するの義務なりとて富貴の婦人喜びて盡力せり、是れ實に富める者の貧しき者に對する一の義務にして美事と謂ふべし。

近時一婦人あり、予に語りて曰く、予は貴國に在りて、救濟事業の爲に聊盡力する處あり、されど共、割合に貴國の婦人は已が同胞に對して冷淡なる觀なき能はずと。予は信ず我國婦人の慈善心に富み、能く救濟事業に盡力しつゝあるを。

各國固より其狀体を異にす、我邦の婦人は內を治むるを專一の務とし、外に對してはて〳〵しく働く事を好まざるが故に割合に其事業の目立たざるのみ、然ども、此言亦反省するの價なしとせず、家事を治めて後、時間と資力とに餘力あるもの間接直接を論ぜず、願くは吾國婦女子の品位を高むるか爲めに、可憐なる我同胞姉妹の爲に益同情を垂れんことを切望して止まざるなり。

◎ベラード孃の演說

今晩は皆さんが御出で下さりまして、私共は誠に滿足に思ひます。皆さんは御存じで御座りますまいが、私は今年の一月十七日、東京を出立致しまして、今月の七日此處に着きました。到着の後二三日たつて、一人の奥さんが私の處に御出でになりまして今晩の事に付きまして色々御話が御座りました。

此奥さんのおつしやいますには、此家の校長さんは富士艦の水夫方を招きたいが誰も日本語が出來ます人が御座いませんから大變に困りてゐらつしやいます、ところが私は日本から歸りて來ましたと云ふ事を御聞になりまして、私に御賴みになりました。此奥さんの話を聞いて私は初めことわりました、なぜと云ふに東京に住んで度々女の御方に御話を申上げましたが決して男の御方に御話を申上げんでした、さうして急に此大勢な御方に御話をする事が出來ませんと申しました。けれども奥さんは連りに外の御方が御座いませんとおつしやいましたから仕方がない承知致しました。

私は日本の言葉を勉强して居りますが、まだ能く出來ませんから、どうぞをかしな言葉を御免下さいまし。日本語が出來ます英吉利人は誠に少う御座います。さうして英國人はいつでも喜んで日本の御方に御目に懸りますが何も話が出來ませんから、親切な心を表はす事も出來ません、本當に殘念です。

今皆さんに此家の建てられてある目的を少し說き明したう御座います。

此家は兵隊のホームと申します。此ホームと申します言葉の意味は、家族と云ふ事で御座います、兵隊と云ふ者は自分の家から離れて居ります。始終兵營の樣なやかましい所に住んで居ります、夫故に大きな兵營の在る所に、大抵一軒のホームが御座います、兵隊は靜に手紙を書きたい、或は本を讀みたいと思ひますなら、此家に色々の坐敷が御座います、丁度自分の家の通り兵隊は此坐敷をつかはれます、こちらで又色々の會を開きます、又聖書の講義が御坐います。

此ホームの校長はいづれも貴婦人で御座います。こちらの校長さんの御父樣は大層えらい大將です。尤もかういふ樣なホームはクリスト教の會で建てた家です。クリスト教の會で建てたるものには色々御座いますが、たとへば皆さん能く御存じの通り、赤十字社が御座います。今日本に此赤十字社は大層盛んで御座います、社員は能く働き、大變金を出します。軍の時に日本の貴婦人方も能く御働きになりまして本當に感心致しました。

皆さん御存じの通りに赤十字社のしるしは看病婦の帽子或は袖の上について居ます。此しるしの譯は何で御座いますか、今晩皆さんに委しい御話が出來ませんが、此クリスト教の兵隊のホームの社員は熱心に此十字架の意味を知らせたう御座います。

皆さんは多分御信仰なさいますまいが聖書は三百三十種の言葉に飜譯して御座います。日本、或は印度、支那、米國、墺太利、國々の信者每日此聖書と云ふ本を讀みます。私は此頃元の布哇の領事安藤太郎と云ふ御方の書いた雜誌を讀みました。安藤さんの御話では、此聖書を讀みました時には澤山西洋の名が御座いましたから、初にはちつとも分りませんでした、夫から段々考へて、又聖書の講義を聽いて熱心に信者になりました。此ホームの内の御方とこちらに今集りました御方は皆さんに一つの願ひが御座ります、即日本に御歸りになります時、若西洋の傳道師の近處にゐらつしやいますなら、どうぞ其御方の講義を聞いて下さい。

あなた方の中にはクリスト教を厭ふ御方が御坐いますかも知れません。或人は此教はやくにたゝない、或は此教は愛國心の妨であると云ふ樣な間違つた考を持て居るかも知れません、又大抵の人は新しい事を厭ひます。「喰べず厭ひ」と云ふ諺の通り。此に付皆さんに一つの短い御話を申上げませう。

今から六十年前にスチユビンソンと云ふ英國人は滊車の發明をして、議事堂に出て議員なる者に此滊車の許を願ひました。さうすると議員は此滊車と云ふものを一度も見た事がない、又速いものですから、餘りあぶなう御座いますと思ふて居りました。さうして議員は此人の願を拒みます積りで御座いました。けれ共或者は此事がまた分りませんから、少し調べて見樣と申しました。さうして段々考へて見ますと滊車と云ふものは實に便利なものであると分つて來ました。今滊車と云ふものを禁ずる方がいゝと思ふ者は實に此世に後れて居ります。けれ共昔の大抵の人は滊車を極厭ひました、新しいもので御座いますから。たとへあなた方はクリスト教が嫌ひでも、どうぞ調べて御覽なさい、短く申しますなら、信者の信仰は一人の能はざる所なき神で御座います、又神は御自分の御造りになりました者を教て下さいます、さうして此教を學ぶ事は人間の爲すべき事で御座ります。

一人の神は日本と云ふ國を御造りになり、又一人の神は英國といふ國を御造りになりましたと云ふ事決して本當で御座いません。私共は皆一人の神が造つたもので御座りますから皆兄弟で御座います。之はクリスト教信者の信仰で御座います。私は人間が皆兄弟で御座いますと云ふ事を考へて、我邦を捨てゝ日本と云ふ遠い國に參りました。私の家は牛込で御座いますから、外の西洋人の家から餘程離れて御座います。けれ共決してさびしう御座いません、信者になります日本の御方は兄弟の樣な親しい友達になりますから。

問答

晩學の婦人の問

を寄せらるる樣、妾は前へ方より久しく學問の心掛候ひしかど、家政の都合止みがたく、あたら空しく歳月を過し、今は二十七と相成候、これより始め候ては最早や時節後れと思はるべく候へども、是非奮發いたしたき存寄に候が、如何のものに候半や、さとしくれ云々となり。これに

答らく

凡そ學問に益の無きはなく、また之を始めるに遲しと云ふはあるまじき也、遲きは即ち決心することの遲きが遲きにて、既に決したる以上は、何時にても之を始めるに遲きと云ふはあるまじき也。たゞ學問と申せば、本を讀み字を習ふことの樣にのみ思ふ人多けれども、之は學問の入り口にて着手の初手に過ぎず、眞の學問には是非、實地の經驗を要とすることにて、即はち書物や机の上にて一と通り習ひたることを其後に實驗する也。左れば、御身は、後にすべきことを前にせられし迄にて決して無益の事に日月を送られしにはあらず。今日迄に、既に學問の半ばを遂げられしことゆゑ、今の時を遲しとは云ふ可らず。讀書と實地とは帶の兩端の如きものにて、右、左より廻り遂にはシカと相合ふものなるか、通常は讀書の方より初まるを、御身は、實地の方より着手せられし迄なり。所謂る學問は、既に夙くより始まり居ることゆゑ、今更新規の事の如く心配せらるるには及ぶまじ。其證據にはいよ〳〵、本に向ひて讀書の修業をせらるるに及べば、悟り方迅速にして、他の書生と異なり、同一の事を聞ても實地に考へ合せて深く感ぜらるゝなるべし。之れ今迄實地の學問をせられし効驗なり、決して失望などせらる可らずとは言ふなり。

時文

◎列傳躰小説史

坪内逍遙
水谷不倒著　春陽堂版

本書は德川文學の研究を目的として、西京、大阪に於ける寛文の假名草子、元祿享保の浮世草子の作者より、文化文政以降江戸に流行したる稗史、草双紙の主なる作者の文學上の傳紀を收めたり。且作者傳に前附するに德川文學の起原を論じて歷史文學、古文學の註解、支那及我國文學の飜譯を論ぜり。されば德川時代の俗文學を知らんとするは甚だ有益なる著述といふべし。而して作者傳はいづれも且て早稻田文學に掲載せられたるものにして、坪内水谷兩氏合著といへども、坪内氏の筆の跡は見えず、また水谷氏の筆のみにもあらで、鶚笑門、饗庭篁村、曉霞處士、野崎左文氏等の筆をも收めたり。

◎先秦文學

藤田劍峯著　東華堂版

藤田劍峯氏支那文學史の著あるべしとは、以前より聞き傳へたる處なるか、其事は實際となりて、此に其第一卷として、「先秦文學」に出版せられたり。筆を支那文學史論に起し、三代文學、周末の南北文學、同歷史文學等を叙述す。猶第三卷には兩漢魏晉南北朝間の文學、第三卷には唐宋五代文學、第四卷には元明淸文學を論述せらるべしといへば、大成完了の後は、支那文學全躰のはじめに、系統的に論述せられたる良著として、史界文學に益をなすと尠々ならざるべし。

◎松虫鈴虫

天遊、天來合著　東華堂版

近來續々出版せられたる、三四種の新躰詩集に就て、正直にいへば吾人は未だ之を稱すべしとなすの詩歌を見出すと能はざるものなり。天遊、天來合著の『松虫鈴虫』の出づるや、之を繙いて見る、たゞ新躰詩のみならず、短歌躰のあり、發句躰のあり、發句に前付のある躰のもあり、兩家共〳〵才氣の澤山あるを示したり。然れども詩として之を稱するに於て、未だ頗る飽き足らざるものあるを如何せん。

◎牧の方

坪内逍遙作　春陽堂版

これ春の屋氏が去年一月以來早稻田文學に連載して、吾人をして早く其完結を見て、一本に合せられんとを仰望せしめたるものなり。世人は氏が第一の脚本「桐一葉」に飽き足らざる處ありて、而して第二の『牧の方』に多くの希望を抱かしめたりき。通覧するに、牧の方なる一驕婦が、奸驕暴戾の間になほ女の性質を失はぬ處など、十分とは行かれど、やゝ巧みに描かれたるはよけれど、之に對する時政のあまりにいくじなしに見えたるは、何となく可笑しく、且つ牧の方の働きを一段下等になしたるぞ遺憾なれ。牧の方のあまりに輕々しき、多辯なる驕婦に描かれたるは、さる大事を仕組む女に似合はざるとなきか。幾時は繼いて先づ「源實朝」「左京光」に於て其胴尾を示すべしといへば、これは一寸其首丈を出したる程の心にて、其處に奥ゆかしき處あるなるべけれども、劇としてはむしろ此牧の方に於ても、幾時の奸智にして、腹藏深き邊を皆迄にては却て悪けれど、今少し餘計に見せたらば、牧の方と對して面白かるべきと思ふは如何、而して吾人は續篇としての二脚本に於て、春の屋氏の如何に幾時なる人物を描くべきや、早く之を見んとを希望するものなり。

女學文壇雜爼

（五月下半期）

片々

◎日本女子大學校　を大阪に設置すべきか、果た東京に設立すべきかに就き同發起人中にも議論あり、されどいよ／＼成瀨氏當初の志望の如くに、大阪に設置せらるゝ次第となりたるが、此際、大阪每日新聞記者は、

◎女子教育の　盛んにせざるべきは勿論なりと雖も、如何にするも新に女子大學を大阪に設立するの必要を認むること能はず、また日本全國一般の教育進步せざるに女子大學を起すは空中の機關を建築せんとする者なり。また女子大學と稱する其實際は其名に稱はず、羊頭狗肉の謗りを免れざらん事、また女子大學に要する適當の教員なき事、資金募集の困難なる事を論據として、女子大學設立に反對の意を表したり。

◎此際可笑しきは、日本新聞の諷諫なり、日本女子大學を目して株式女大學といひ、之が設立の地を撰ぶに付きての可笑しき新作の狂言を揭げ、結句大阪に女子大學を設立するに反對せり。

◎權藤長野縣知事　は女子教育に熱心なるよしにて、縣下巡視中到る處に之を講ず。其說は家庭と學校との連絡せざることの嘆、高等小學校にては女子と男子とを分つて教育すべしといふことに及ぶとぞ。柏田氏千葉に知事となりて、赴任第一小學教員に訓令する處あり、權藤知事は盛んに女子教育をいふ。これ教育熱心の二千石の好一對か。

◎宗教的の慈善　は己の罪業を滅さん爲なれば、私をなすにあり、眞の慈善に非ずと論ずるもの、近時女鑑と日本主義との二あり、二者共に未だ宗教なるものを知らざるの據なきこと能はず。

◎不善是より甚しきはなし　今や我邦慈善事業を稱する孤女院救濟院の數、頗ぶる多く、外面より見ればあはれ君子國の名にも耻ぢずと思はるゝが、扨て其裏面を覗ふに及んで、彼等多くの慈善事業は、多く眞に鰥寡孤獨を救恤する所以のものに非ずして、往々名を之に假りて、私利を營むものあり、名こそ立派に慈惠を稱し、竹の園生の御方を樵代に仰ぎ奉りたることさへあるものにして、其內富籤の不正不義を行ふさへありとぞ。慈善の名を以て商賣をなし私利を營む、其奸惡や最も惡むべく、不善不義之より甚しきはなし。當局者宜しく此邊に究むる處なくんばあらず、否たゞに當局者を俟たずして、正義を愿ふの有志の士、宜しく鼓を鳴して、彼等の不義を攻むべし。

◎感化院　六月初旬に開かるべき地方官會議の節、樺山內務大臣は、英照皇太后陛下御崩御の節の御賑恤金を以て各地に感化院を設立するの可否に就きて諮問する處あるべしと傳ふ。

◎一派の論者は　正行の母を見よ、細川忠興の妻を見よと、呼はりて、女子に要求するに頗る重きを以てしながら、彼等に供するに、賢妻貞婦たり得べき餘裕を與ふることを欲せず、其境遇を狹隘にし、其教育を偏狹にし、其識見を寡小ならしめんとす。彼等が與へんと欲するの教育を以て、如何に彼等が尊崇するが如き烈婦賢女は出來ざるなり。昔の貞烈なる女子は如何にして生れしか、彼一派の論者等は、未た其所以を知らざるものなり。

◎四條流の女禮　中村龜太郎氏といへるは畫伯田能村直入翁の高足の門弟にして諸禮の道に通ず。此人家庭教育中最も欠くべからざる禮法の漸次衰頽したるを嘆じて、男禮には小笠原流を、女禮には四條流を用ゐて、漸く日本普通の禮式にして、通用し得るの端緖を得たりとぞ。

◎いつもながら　海外留學生中の無主義無節操者の不品行にはあきるゝ事ながら近來獨乙留學生には舞踏の稽古に熱中するもの、或は女探しに餘念なきものなど多く、某々二人の如きは近く獨乙婦人と結婚するとかいふ。

◎今夏東京にて　の婦人衣服の流行は重に絽物にありて、絽の丸帶、絽の重ね、博多絽、縞絽帶地、絽の羽織、絽の半襟等多く流行せり。絽物の流行は、昨年來ます／＼盛んになれるなり。

時報

◎大阪に於ける日本女子大學校設立發起會幷に披露會

日本女子大學校發起人會は五月廿六日午後一時より大坂ホテルに於て開會せり參

會者は鴻池善右衛門、內海忠勝、土倉庄三郎、廣岡久右衛門、田中市兵衛、田村太兵衛、田邊貞吉、山中吉郎兵衛、北畠男爵夫人等を始め、總て四十餘名にして大隈伯及び夫人も之れに臨場したるが、內海知事先づ起て本校設立に係る既往の沿革を述べ、次に大隈伯は大坂に女子大學校を置くの必要より發起人諸氏が本校の爲め大に力を盡さんとの希望を陳じ、發起人は着々設立に取掛る旨を申告し、終つて二時過ぎ散會、大隈伯等は一先つ旅館花屋に引取り、更に午後六時二十分より同所大廣間に於て創立披露會を開きたり。案內に依つて參會したるもの數百名にて頗ぶる盛況を極めたるが、尙ほ大隈伯を始め折ふし來坂したる土方宮內大臣近衛公爵等も臨場し、最初內海知事の挨拶終りて成瀨仁藏氏を紹介し、成瀨氏を第一席とし、大隈伯、土方伯、近衛公等順次女子教育に關して演說する所あり。次に板垣伯、京都府知事山田信道男、大坂控訴院長北畠治房男等の賛文及び廣瀨宰平氏の演說草稿代讀あり、それより來會者一同に折詰料理の饗應ありたり。扨て其發起人會に於ては、現在の創立委員十五人に加ふるに更に五人を以てし、また設立費は最初三十万圓と豫定せしも、二十五万圓にて充分なるべき見込にて、東京にて十万圓、大坂にて十万圓、地方にて五万圓を分擔して募集せん計畫なり、また同校敷地は昨年既に東區上本町筋內安堂寺橋通邊にて四千坪程の高燥なる敷地を購入なしあるなり。

◎香川縣私立高等女學校新築落成式　は五月三十日を以て擧行し、同日同地方巡錫中の村雲日榮尼公にも御臨場あらせられたりとぞ。

◎私立金澤女學校の印度飢饉救恤　私立金澤女學校に於ては、生徒一同毎金曜日を期して、一時間宛生徒一同手工をなし、其利益を以て慈善事業を補助することなるが、此程金十圓餘を印度飢饉救恤の爲めに送致したるよし。

◎大和俱樂部　京橋區金六町金陽館內柳生九代の裔松本愛子は、豫て婦人義勇會といへるを組織し、婦人に武道を敎授し來りたるが、今回更に擴張して麴田區三崎町の原に本部を建築し、且つ大和俱樂部といへるを設置して、廣く宴會集會等の貸席を爲し、其の所得を以て道場費に當て益々武道を獎勵する由にて、目下有志者より基本金の義捐を申込む者續々ありと。

◎女子高等小學校設置の議　熊本高等小學校の生徒年々增加して、校舍狹隘を告ぐるのみならず、本年の學期に至りては、將に一千八百名にも達せん有樣にて男生徒と女生徒とは約六と四の比例を以て塡充せられ、敎員は多しと雖も其管理敎授の困難なるは他校に比して、多く見ざる處なり、之を以て同校隣地なる縣立病院が、幸にも本年度の縣會に於て他に移轉することになりしを以て、市にては此機失すべからずとなし、既に先頃を以て該病院跡を市に下渡されんことを請願に及びけるが、若し此願意を聽許せらるゝに至らば、病院の移轉を待つて直ちに現在の熊本高等小學校生徒の男女を分離し、男生徒は現在のまゝ本校に据置き、女生徒は悉皆病院跡に移して熊本女子高等小學校を獨立せしめ、双方相待つて益々完全なる敎授を施さんと專ら計議中なりと云ふ。（九州日々新聞）

◎忠婢受賞

岡山縣鶴屋郡山手村
田中杉二婢　つ　ま

天資柔順にして傭主羅津義忠に仕へ能く家法を守り誠實勤勉怠ることなく常に紡績裁縫の業を勵み主家數口の兒女に對し專ら羅褓の勞を執り傍ら輔育を輔けて倦まず終始忠勤を盡す玆に十有五年志操一日の如し洵に奇特とす依て爲其賞金三圓下賜候事

明治三十年三月　岡山縣知事　河野忠三

◎孝婦受賞

德島縣三好郡谷飛村大字洲津村
万藏妹　荻田きし

資性溫和にして幼より克く身を孝悌に致し明治十九年官曾て之を褒賞す其後弟不治の惡疾に嬰り母もまた老衰且つ病み家產日に落つ是に於て自ら其衣食を節し湯藥看護具に務む其志操を渝へざるもの又玆に十有餘年洵に奇特とす仍て其賞として金三圓五十錢下賜候事

明治三十年二月　德島縣知事　山縣伊三郎

◎家庭新聞の發行　敎育報知の發行所たる東京敎育社にて、追々家庭と學校との連絡を目的として、家庭新聞と名つくる一雜誌を發行するの計畫をなせり。

◎土語研究　臺灣島にて、本土人及び土人彼我婦人間の交際を暖むるには勢ひ土語の必要ありとて、七里某の妻、率先者となりて、其敎師として臺灣婦人一人を聘し、五月初旬より四五の婦人を會して、共に研究を盡くしつゝありといふ。此擧頗る嘉すべし、こひねがはくは一時の出來心にて終らしむることなかれ。抑も臺灣の弊政を排し、惡風を淸め、土人をして我に心服せしむるに於ては、本土より移住せる高尙なる婦人諸氏に俟つこと多し乞ふ之を勉めよ。

◎婦人郵便脚夫　英國に於て數年以前より婦人を郵便脚夫に使役したるに、其緻密にして勤勉なる性質は、最も此の仕事に適し居れりと云ふ。

日本園藝雜誌

第八十號

明治三十年三月廿五日發兌

(毎年四回發行一部正價金三拾錢)

發行所　東京京橋區新富町五丁目十七番地

日本園藝會假事務所

日本宗教界の評論

日本宗教

第二巻第十一號

五月三十日刊

定價一冊十錢●郵税五厘●六部前金郵税共六十錢一年前金一圓十五錢見本は郵劵十一錢を要す

東京麹町區下六番町六番地

發行所　日本宗教社

布川靜淵、小此木秀野合著

俳諧史傳 全一冊

和裝 正價金貳拾七錢
美本 郵稅金四錢

これ本邦唯一の俳諧史なり、俳諧に志すの徒、坐右必ず一本を備ふるを要す

發賣所 東京麴町區下六番町六番地 文學雜誌社

●切抜通信の要旨

●切抜通信をなすへき概目は農工商業政治法律外交貿易政黨倶樂部教育宗教歷史詩歌運輸交通土木建築鑛業山林美術演藝各人身上に關する事等凡そ諸新聞紙上掲載の作は小說廣告に至るまで其委托に應し精閱遺漏なく勉めて配達を迅速にして以て愛讀者の便益を期す

東京市京橋區采女町廿一番地

東京通信社附屬

新聞切抜通信部

●切抜手數料大要

●一己の身上に止まる通信は一ヶ月金貳拾錢とす●一事業又は一事物に止まる通信は一ヶ月金參拾錢より金五拾錢まで●會社又は一團體の全般に關する通信は壹ヶ月金五拾錢より金壹圓まで●前記の事項と雖とも關係の範圍廣く日々記事の多數なるものは臨機の契約を爲すことあるへし●月數に拘はらす件數にて委托せらるゝものは東京は十件に付金貳拾錢地方は郵稅を併せ金參拾五錢とす尤も細事項は總て號外として件數に算入せす●本社切抜通信規則書御入用の方は御通知次第郵送すへし

明治女學校圖書寄贈報告

第六回

一櫻園集◉海軍歷史抄◉幕府始末二部◉谿莊餘輝◉京華要誌◉謠曲通解五冊◉開國始末◉妖怪學講義◉吹塵錄 伯爵 勝安芳殿

一經國美談◉和歌宇飛麻奈飛◉平野國臣傳 各一部 中山光子殿

一日本文學史論 著者 內藤虎二郎殿

一ロングエロー詩集◉マコーレー文集◉チョーサー文集◉Ruĕs Help◉英文女子の業務◉新約聖書神學 各一部 高杉幸子殿

一日本地文學◉萬國地誌◉日本地誌◉政治地理◉朝鮮西伯利亞紀行 著者 矢津昌永殿

一森林保護學 著者 中牟田五郎殿

一巴里城下盟◉閑龍 著者 森本駿殿

一本草辭典◉日光山植物目錄◉植物の內景及生理 著者 松村任三殿

一支那開化小史◉日本開化小史 著者 田口卯吉殿

一禹氏小兒科學 著者 伊藤祐彥殿

一黑死病論 著者 高田耕安殿

一家政學(下田歌子著)日本史要◉普通國語◉神皇正統記 著者 關根正直殿

一外科通論 二部 著者 有松戒三殿

一眼科學 著者 故榊俶殿

一婚姻進化論 著者 藤井 殿

以上

明治女學校圖書掛

明治廿七年二月十四日内務省許可
明治三十年六月九日印刷
明治三十年六月十日發行

發行兼編輯者　東京市麹町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　根岸高光
發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場（電話本局十九番）

明治廿五年三月十五日遞信省認可



明治廿五年三月十五日遞信省認可

